# U.G.II

鯖味噌汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｕ．Ｇ．ＩＩ

【Ｎコード】
Ｎ６８４５Ｅ

【作者名】
鯖味噌汁

【あらすじ】
第一次銀河統一戦争（Ｕ．Ｇ．Ｉ）より約５００年・・・・・人類統一合衆国（Ｕ．Ｕ．Ｐ．）は聖星宗教国（Ｄ．Ｒ．）と完全に和解し、銀河連合軍（Ｇ．Ａ．Ｆ．）を設立。双方の技術や資材をもとに宇宙戦艦の製造などを行っていた。しかし、その平和をよそに新たな異星文明国家が宇宙戦艦同士の武力衝突という残念な方法で見つかってしまう。ＧＡＦはこれを鼎皇文明同盟帝国（Ｅ．Ｃ．Ａ．Ｅ．）と認定し、即座に宣戦布告。これがのちにＵ．Ｇ．Ｉを上回る、１００年にも渡る第二次銀河統一戦争（Ｕ．Ｇ．ＩＩ）へ

の引き金になるのであった・・・・・・・

## Ｅｐ．Ⅰ　侵攻開始

「コーヒーまずいっ！」
吹きかけられた。
ある意味・・・間接キス？
「もうちょっと甘くしろって、何度言ったらわかるわけ？
使えないわね、ほんとに」
この子はファリエナ。僕の幼馴染。
シィーア人と地球人のハーフでこの銀河連合軍第一侵攻艦隊の航宙機隊隊長で、僕がいるこの銀河連合軍第一侵攻艦隊第四半生体艦第一部隊の隊長。
・・・とりあえず、いろいろわかんないと思うけど、何とかついてきてね。
「もう少し、感謝の心とか持ったらどう？」
「そうよファリエナ。レステアくんのことも」
この子はギャルシュ。本名はものすごく長い。
シィーア人でこの中だと一番普通。
身長２００ｍ弱の息子持ち。
・・・まあ、詳しいことは後で。
「こいつのことなんかかばったって無駄よ。どうせドＭなんだから」
「でも、そんなこと言ってる優しいルシュりんも私は好きよ」
この人はファリエナさん。
・・・同じ部隊だけどなんか呼び捨てできない人。
話す必要がない要素は置いといて、歴代ＳＣ値ランキング二十五位というものすごいＳＣを持ってる。
・・・これも、説明は後で。
ちなみに「ルシュりん」っていうのはファリエナさんがつけたギャルシュのあだ名。
「ところでシュエりんは何を読んでるの？」

「あっ！」
今本を取られた人はシューエ。
本ばっかり読んでるからちょっと話しかけづらいかな。
時々、自分のことを話してくれないことがある。
もちろん、「シュエりん」はファリエナさんがつけたあだ名。
そして最後に、僕はレステア・フィーバック。
何にもいいとこ無いけど、一番この中でマシだという確信はある。
・・・Mじゃないからね？
「返してください！」
「やっぱり、上目遣いでこっちを見てくるこのアングルがたまらないわね」
・・・・・・
ボクタチハマダナニモキイテイナイ。
「うぅ・・・・・・」
「そういう真っ赤な顔、久しぶりに見ちゃった。カワイイ～。
この連続こそまさに必要よね。アレに」
・・・・・・
ボクタチハマダナニモキイテイナイ。
「は～い、返してあげるから」
「えっ！」
ドサッ！
「その代わり私も受け取って～」
・・・・・・
残念ながらこれが僕達の日常風景です。
もう慣れた。
色んな意味で。
「にしても、待機時間長いわねぇ」
結局コーヒー飲んでるし。
「カンリイは何やってるわけ？」
「今はカンリイって呼んだらまずいでしょ」

「別にいいじゃない。あいつに変わりはないんだし」
カンリイ・・・キサラギ指揮官は銀河連合軍第一侵攻艦隊指揮官。
そして、僕とファリエナの同級生でもある。
僕ともファリエナとも友達だ。
「あの優等生、ほんとに何やってんだか」

・・・鼻がむずむずする。
どうせあいつらだろう。
「どうかしましたか？　キサラギ指揮官」
「いや、何でもない」
つくづく「ＳＣ能力」というものに腹が立つ。
物理的障害を無視し、精神的にＳＣ能力生物と交信することができる。
俺にもあと少し、あと少しあれば・・・・・・
「どうかしましたか？」
「いや。少しＳＣというものに腹が立っていただけだ」
「そうでしたか・・・・・・」
まあ、指揮官としての能力にＳＣはあまり関係ないが。
「各艦の状態は？」
「生体艦一隻を残し、準備完了です」
またあの生体艦か。
あいつらにもいい加減どうにかしてほしいところだ。
「・・・第四半生第一に何とかしろと言え」
「了解。
第一部隊ギャルシュ、例の生体艦を規定位置につかせなさい」

「だってさ、ギャルシュ」
「またリボリアは！」
ギャルシュがボタンを押すと壁の一方が大きく開き、全体がガラス窓になる。

ガラス窓には壁に入りきらないほどの白い何かとこちらを見る巨大な赤い目があった。
「リボリア。
・・・あなたも軍人としてちゃんと命令には従いなさい。
・・・やだじゃないの。あなたは一人の軍人として、立派に認められているんだから。
・・・はぁ。とにかく、移動したらまた来てもいいから、配置に戻りなさい。
・・・まったく」
白い体が少しずつ離れていく。
生体艦。
一般的にはそう呼ばれている生物の戦艦。
何でも製造・・・じゃなくて誕生にはどんな生物でも「親」っていう存在が必要らしい。
今、ギャルシュは航宙機隊所属だけど、昔は生体艦隊所属だった。
そのときの生体艦がさっきのリボリアなんだけど、ギャルシュが航宙機隊に移るときに破棄する予定だったのが、優秀な戦艦だったせいで破棄されずにそのまま使われることになった。
でも、ギャルシュの母性本能が目覚めちゃってたせいでギャルシュに甘えまくり。
僕個人は別に迷惑ってわけじゃないけど、艦隊としては相当迷惑なんだろうなぁ。
「ギャルシュ、また聞こえてるわよ」
「ごめん。怒るときはいっつもこれだから」
ちなみに、ギャルシュは独り言を喋ってたわけじゃない。
ＳＣ能力を使ってリボリアと喋ってたんだ。
生体艦全般に言えることだけど、もともと軍事用の戦艦だから精神的にもほとんど成長しないし、普通の生物にはあるはずの器官がほとんどない。
リボリアはさっき目を開けてたけど、あれも結構稀な例みたい。

「さて、用意しましょうか」

「全艦、用意完了しました」

「そうか。では私は準備に入る。あとは頼む」

「了解しました」

扉を抜けると服をたたんで全てロッカーにしまう。

そうして全裸になると、横の白い肌へと触れ、その中へと溶け込んでいった。

温かい。

レイの中に入っていると本当にそう感じる。

――お父様、用意は出来ています。

心の中にレイが話しかけてくる。

レイは半生体輸送艦。今回の全体的な作戦もレイが要になる。

――そうか。全ハッチを開いて、非生体艦を入れてくれ。

――わかりました。

そういえば、久しぶりだったな。レイと話すのは。

――レイ、すまなかったな。しばらく会えなくて。

――いいえ。お父様はいつでも私の中にいますから。

心、という意味じゃなくても本当にレイの中に俺はいるか。

――お前も・・・甘えたいか？

――え？

――あのリボリアのようにだ。

返答がなくなった。
我ながら、意味の無い質問だったな。
いくら無機質に対応しても、やはり俺が親ということに変わりはない。

――いいえ、別に――
――無理はしなくてもいい。ここにはお前と俺しかいない。
また返答がなくなった。
――はい。
答えと共に恥ずかしく答えているのが伝わってきた。
――今度はいつもより大変かもしれないが、時間があればまた来るからな。
――は、はい！
こんなにレイが甘えたがっていたとは正直思わなかった。
ＳＣで語るからこそわかる事実。
――ところで、非生体艦の収容状況は？
応答がない。
――すみません、完了していました。
つい・・・舞いあがってしまって・・・・・・
つくづくかわいいものだ。

――三次元空間移動の準備はできているか？
――はい。お父様が来る前からすでに準備はしてあります。
――わかった。

俺はＳＣを副艦長へと向ける。

――全非生体艦、収容完了だ。
――確認済みです。

やはり・・・そうだったか。

――すまない。全乗組員に伝えておいてくれ。
――わかりました。

再びレイに戻る。

――これより、侵攻艦隊支援用小惑星基地へ三次元空間移動を行う。
――地点把握。出力問題なし。
――空間跳躍！

## Ｅｐ．ＩＩ　雷撃艦艦隊戦

「今日もあたしのは絶好調みたいね」
「飛ばせばいいってもんじゃないと思うけど……」
航宙機隊用シュミレーターをした後、僕達はなんとなく二人だけで話していた。
「いいじゃない。別に死ななかったんだし」
「小惑星帯をあの速度で駆け抜けるのはかなり間違ってると思うよ。いろいろと」
ファリエナは何年か前にやった筆記テストで覚えさせられたはずの「小惑星帯航行に関する速度」という項目を忘れているのだろうか。
でも、この艦隊の航宙機隊隊長である限り、それくらいはわかっているはずだと思う。
ましてやカンリイくんが選んでくれたんだし。
「あたしはね、機械が教えてくることには極力頼らないの。
別にあの速度でも飛べないわけじゃないけど、今までもあれ以上の速度で飛べないとできなかった作戦なんて何回もあったじゃない」
「それはそうだけどさ…僕はファリエナが心配だから言ってるんだよ？
だってファリエナが死んじゃったら僕、どうすればいいのかわかんないよ」
「レステア……」
ファリエナが普段見せないような表情をした。
「ファリエナがいなかったら、どうやって起きればいいんだよ……」
「……」
…あれ？
僕、地雷でも踏んじゃった？
「…レステアァ！」

クリーンヒット。
どこを蹴られたのか認識する前に、僕の視界はフェードアウトしていった……

気がつけば部屋の中。　多分、ファリエナが運んでくれたんだろうな。
「感謝しときなさいよね」
「自分で気絶させたくせに」
と言うと、ファリエナが怒るのでそのまま気がつかないフリをして起きた。
すると、なぜかファリエナがまた普段見せないような表情をした。
「大丈夫？　さっきの、結構痛かったでしょ？」
「…？
特に感じなかったけど……」
一応、補足しておくと「感じた」というのは、そういう意味じゃない。
…考えすぎかなあ……
「だってほら、レステアの…その……」
久しぶりのような気がする。ファリエナが恥ずかしがっているのを見るのは。
そういえば、今までいろんなことがあってもこんな関係をしてこれたのはファリエナのこの表情と笑顔があったからなのかもしれない。
…だって、かわいいんだもん。
「そ、そこに……」
「そこ？」
そういえばさっきから股が……
「うわあぁっ！」
千年殺しのように後から痛みが来た。
悶える。

一体どんな技使ったんだろ……
「あらら……」
まるで他人事のようにファリエナが見ている。
ファリエナのせいなのに……
そう。いつもこんなときだ。
「レーダーに敵影確認！
雷撃艦二十隻が角度百二十度で接近中！
至急、各乗組員はフェイス２にて待機！」
敵襲なんていうのは。
「行くわよ！」
僕の状態なんか気にせずにファリエナが駆けていく。
「ま、待ってよ……」
走り出した。
日常にけりを付けに。

「敵に捕捉されている可能性は！」
「８３％です！」
捕捉されていない・・・と考えてよさそうだな。
好都合なことに、こちらのレーダー技術とあちらのレーダー技術ではかなりの差があることがこれまでの戦闘で分かっている。
ただ、あちらがわは条件によって索敵範囲がかなり上下するらしく、今までの戦闘条件から捕捉されているかどうかを判断するしかない。
しかし、あちらがわはレーダー範囲外にでも攻撃可能のため、油断はできない。
「通常艦隊戦隊形に移行後、第一、第二駆逐艦は左方へ展開、第三、第四駆逐艦は右方へ展開！
準備が整い次第ヴァルキリーを発艦！　敵レーダー捕捉７５％時点で生体艦を空間跳躍！
十隻撃沈後、主砲一斉射！」

「了解！
各艦長に伝達してください！」
増援さえなければなんとかなるはずだ。
もっともまだここはＧ．Ａ．Ｆ．の勢力範囲内。
増援はほぼ考えなくてもいいだろう。
さしずめ、流れてくる防衛衛星でも撃沈しようと思ったのであろうか。
さて、あと俺がやることはほとんどない。
あいつらが頑張ってくれれば、俺はどうにかなる。
…他人への責任の押し付けだが。

「またいつものやつ、決めてやるわよ」
「今回はＦ２無しだってさ」
Ｆ２……
僕達が乗るヴァルキリーのいわば最終兵器みたいなもの。
ちゃんと狙えば軽く戦艦一隻は撃沈できる。
どれもエネルギーを膨大に使用したり、搭乗者のスキルが高くないと使えない。
「久しぶりに二隻ぐらい潰そうと思ってたのに……」
「ま、仕方ないよ。僕はあんまり使いたくないし」
ちなみに、僕達第一部隊がいつも使うＦ２は紫電荷粒子砲。
…詳しいことはまた後で。
僕達は格納庫につくと素早くヴァルキリーに乗り込み、ハッチを閉じる。
様々なシステムが起動しながら機体全体が唸りをあげる狼のように振動していく。
「ＴＭＯＶ、接続！」
ＴＭＯＶ……
手短に説明すればヴァルキリーとカタパルトをつなぐただの台みたいなもの。

…ごめん、もう考えてる余裕ないんだ。
「ヴァルキリー、ＴＭＯＶカタパルトへと移動開始！」
床が下がって六機のヴァルキリーが下りていき、各機が回転しながら移動し、一列に並んだ。
緊張が一段と高まる。
興奮と恐怖が同時に襲ってくる。
「カタパルト発射まで、３、２、１……」
覚悟を決める時間もなく、僕達は凄まじい重力に襲われる。
しかし、最高点に達する前にＮＧＲが起動して艦にいるのと同じ感じになった。
「…ステ……」
こうなると、自分が数分後には光線が飛び交う戦場を駆けていることなんて忘れてしまう。
現実すぎる現実が現実を奪っていく。
「レステア！」
「わっ！」
ファリエナの声で現実へと戻ってくる。
ここは現実だったのだ。
「何ぼけっとしてんのよ！」
「…あ…ご、ごめん」
「…ったく。
各機、通常戦闘時の隊形を維持。
命令までＴＭＯＶの解除を禁じます！」
「「「了解！」」」」
と、いつものように一隻の生体艦が僕達の周りを飛び回りながらやってきた。
「よろしくね、リボリア」
小さくつぶやいたはずなのに、即座にファリエナから通信が入る。
「あんたバカじゃないの？
聞こえるわけないでしょ。ＳＣ３５のくせに」

そう…僕にはＳＣ能力がない。
ＳＣ能力自体は誰でも持ってるものだけど、明確に定められたＳＣ１００の基準を上回っていないと能力としては全く意味がない。
でも、もともと今となっては珍しい、純粋な地球人の僕がＳＣ能力なんか持ってるわけがない。
「こういうのは伝えることじゃなくて気持ちだよ。気持ち」
通信が切れていた。

「各艦ヴァルキリー第一部隊は敵レーダー捕捉範囲７０％を通過！」
「攻撃の兆候はまだ一回もありません！」
完全に気付いていないな。
今仕掛けてもいいだろう。
「駆逐艦の航行速度を上げ、生体艦を空間跳躍！」
「了解！
各生体艦搭乗員、空間跳躍！」
レーダー上から一気に数百の点が消え、そして敵付近にそれらの点が現れた。
「敵艦、迎撃、攻撃を開始！」
「駆逐艦、及び各艦の攻撃開始！」
「了解！
全艦、戦闘開始！」

「全部隊ＴＭＯＶ解除！
各自攻撃を開始せよ！」
「了解！」
解除を終えた順にレーザーの飛び交う戦場へと飛んでいく。
「部隊機のＴＭＯＶ解除確認」
「突っ込めぇ！」
ヴァルキリーが言ったのとファリエナが言ったのはほぼ同時だった。

また体が後ろに押しつけられるがＮＧＲで元に戻る。
そう考えた瞬間に周りに表示されている敵艦の一つがカウントダウンを始めた。
「解散！」
そうファリエナが言うと僕たちは中央に穴を空けるようにする。
するとカウントダウンが消え、穴の中をレーザーが飛んでいった。
レーザーはもちろん光速で飛んでくるから撃たれた瞬間に狙われていればアウト。
つまり、撃ってくる前に避ける必要がある。
さっきのカウントダウンはいつ発射されるかが表示されていた。
主砲だったからまだよかったけど、対航宙機用のやつは撃つのに一秒もかからない。
それを避けるには、シミュレーションでは絶対わからない「勘」が必要になってくる。
それさえ修得できれば戦場ではほぼ死ぬことはない。
「私達が引きつけます。撃墜をお願いします」
「了解！」
他の部隊が先に行って雷撃艦の攻撃を受ける。
「直線に赤電で攻撃！」
「「「了解！」」」」
赤電苛粒子砲を敵艦に向ける。
通り間際に全体に浴びせかける。
レーダー上から一つの巨大な点が消えた。
「やりぃ！」
ファリエナからそれを聞いた直後だった。
「全部隊、攻撃範囲より撤退せよ！」

「ヴァルキリーが撤退開始！」
「全機攻撃範囲より撤退後、即座に全艦主砲一斉射！」
「了解！」

…出た。
「放て！」
周囲から赤色や黄色の光が放たれると、敵艦隊に瞬時に届く。
レーダー上から十数個の点が消えた。
「敵残存勢力無し！
勝利です！」
直後に艦内が沸き立つ。
「ヴァルキリーの収容、生体艦搭乗員の救出はまかせた」
「了解」
「ご苦労だった。君も」
「あ…ありがとうございますっ！」
俺は未だ冷めていない指揮室をあとにした。

雷撃艦二十隻の艦隊。
この艦隊の人員と戦艦をもってすれば他愛もない敵だった。
作戦も最も簡単でそれぞれの特徴を生かしたもの。
小惑星帯でもなければ惑星重力圏内でもない。
勝って当たり前。
だが、ここからは帝国の勢力圏内。
大きな小惑星帯は四。
惑星は十七。
機動要塞は確認されているだけで四十。
地球が属する太陽系とシィーアが属するジシル系、二つの星系を足した数を既に超えている巨大な星系。
それに今からたった四十三隻の戦艦と五百十二隻の生体艦で挑むことになる。
最低限、敵の主星ファーリルに着くまでに越える必要のある小惑星は二つ、真っ向勝負になる惑星は一つ。
帰還してもいいことにはなっている。
所詮は「第一」侵攻艦隊。

だが、せめておおまかな戦力は把握しなければならない。
それまでに俺ができることは一つ。
レイを…いや、この艦隊を守る、精一杯のことをすることだけだ。

# Ep. III　航宙艦艦隊戦

Ｅｐ．ＩＩＩ　超撃艦艦隊戦

「失礼します」
俺の部屋に誰かが入ろうとしていた。
「誰だ」
「私はファリエナ航宙機隊隊長です」
カメラで一応確認する。
やはりファリエナだった。
「入れ」
扉を開く。
「失礼します」
扉を閉めた。
「何よ、一体。いきなり呼び出して」
…やっぱり、ファリエナはこうでなくちゃな。
「いや、特に」
「用も無いのに呼び出さないでよね。私だっていろいろあるんだから。
あんたはあんたにゾッコンの副艦長がいるからいいでしょうけど」
「ゾッ…コン？」
初耳だ。
「あんたの前だとあの副艦長、完全に乙女の目をしてるわよ？
それに私、あんたと話したあとに溜め息ついてるの見たし」
確かに優秀なやつだとは思っていたが……
「今度、別の艦隊の指揮官になるとき、副艦長候補を見てみなさいよ。
なんでもあの女、指揮官試験をけってまであんたのそばにいたいみたいよ？」

どうりで、どこかで見たことのある顔だと思った。
全部の候補に載っていたわけか。
「そうか……」
「そうか、じゃないでしょ。そうか、じゃ。
付き合っちゃいなさいよ」
またそういうことを言い出す。
これは面白がり屋…というよりただのお節介だな。
「…好きでもないのに付き合えるか」
ファリエナの顔がいらついている顔に変化する。
「はぁ？
あんた、女から『好き』って言わせるわけ？」
「そう…なるな……」
恋人が欲しいなんて、思ったことは今まで一度もない。
必要だと思ったことがそもそもないからだ。
「あんたねぇ、一体――」
「そうやって、お前も言われるのを待ってるわけか？」
「な……」
ファリエナの顔がそのまま赤くなっていく。
「たとえどんなに色気を出しても、綺麗になっても、お前がお前である限り、あいつが気付くわけがないぞ。
あいつは銀河連合軍一…いや、全銀河で一番の鈍感だ。
おまけに女を意識したことが人生の中で一度もない。
そんなやつを振り向かせる確立なんて、天文学的な数字になるぞ」
「う、うっさいわね……
あんたには…関係ないじゃないの……」
「ま、あそこまで鈍感な上に性格も外見もいいせいで、軍の中では女殺しとして通っているわけだが」
ファリエナがむすっとする。
彼女も、悪い人材ではあるまい。
むしろ、良い。

…口を閉じていればだが。
…まあ、中には口を開けたほうがいいやつもいるらしいが。
「それに、何でも、お前が他の艦隊の任に就いているときに『ソレ』のせいで事故を起こしかけたことがあったそうじゃないか。
それも何でもないときに」
「だって、あれは……」
「証言によれば、偶発的にお前を押し倒すような形になり、お前が操作を誤ってヴァルキリーを発進。
格納庫の中にデブリを溜めているような、だめな司令官のところでなければ、お前らを巻き添えにして機動要塞撃沈だぞ」
失態を言われたのが恥ずかしいのか、思い出して恥ずかしいのかはわからないが、まるで風邪をひいたように顔がさらに赤くなる。
おそらく後者だろうが。
「喧嘩してるくせに、お構いなしに『どうしたの？　どうしたの？』ってうるさいし。
一回ぶん殴ろうと思って襟首掴んだらリフトが倒れてそのまま操縦席入り。
あとは…よく覚えてないわ」
「泣いて心配されるまでは、意識も完全に飛んでたらしいな」
「…うん」
「……」
「……」
ひとしきり話題が終わってしまったために、会話が途切れてしまった。
そして、改めて聞く。
「お前は…レステアのことが好きなんだろ？」
「…大好――」
「ファリエナー、なんでこんなとこにいるのー？」
なんという鈍感だ。
レステアが入ってきた。

「ど、どこから聞いてたのよ！」
「え？　何か話してる、ぐらいしかわからなかったけど」
こういうときにこの性格は役に立つ。
「それよりあんた……」
鬼のような形相とは、まさにこのことである。
…こんな女と仲良くしていけるレステアが信じられない。
「なんでドア閉めてないわけ？」
「閉めてはいた。だが…ロックを忘れて――」
襟首をつかまれる。
抵抗する暇もなく、俺は投げられた。
「このくそ指揮官！
あんたのせいでめちゃくちゃになるところだったじゃないのよ！」
…非常に痛い。
だが、それ以上に痛みを被っている人物が俺の下にいた。
「なんで僕まで……」
「カンリイも悪いけど、それ以上になんであんたが入ってくんのよ！」
レステアがかわいそうだ。
…本当に不思議な二人組だ。
このまま漫才でもやればよさそうなものなのに。
「だって、１４：００に全体でシュミレーションをやるって言ったはファリエナじゃん……」
「カ、カンリイ指揮官！　大丈夫ですか！」
今度は副艦長。
…正面から見ずに下の方から見てみる、というのもなかなかいいものだ。
「…心配ない……」
「骨とか折れていませんか？　お腹変じゃありませんか？　意識ありますか？」
…最後の一個は、俺がお前に答えているだけでわかるだろうが。

「何よ。あんた、あたしがそんなに凶暴だとでも言うわけ？」
「あんたとは何ですか！？　私は副艦長ですよ！？」
「私は航宙機隊隊長よ。
あんたと同格、ってわけ」
…女同士の喧嘩は見ごたえがある、と心の中で思った。
「位が同じだからといってそんな言葉を使うなんて、あなたは本当に軍人ですか！？」
「はいはい。よくわかりましたよ、副艦長様様」
…おもしろくなってきた。
「カンリイ指揮官！　なぜこのような下種な女を航宙機隊隊長にしたんですか！」
「ほーう。あんたもそういう言葉、使えるんじゃない」
とりあえずファリエナは無視して話を続けた。
「ファリエナ航宙機隊隊長は…銀河連合軍の中でもトップクラスの腕の持ち主だ。
信頼のおける仲でもある」
「し、信頼のおける仲！？」
どうやら、まずい一言を付け足してしまったようだ。
一気に着火される。
「…少し、不謹慎じゃありませんか？　ファリエナ航宙機隊隊長」
「え？　ああ。
そりゃ、あんなことやそんなことぐらいやってるけどね。
さっきまでそうだったし」
…おい。
さすがにそれはまずい。
予想通り、怒りとも憎しみともつかない表情をする。
「…わかりました。
カンリイ指揮官、失礼しました」
何も言わずに出て行った。
…これは、指揮に響きそうだな。

「さてと、邪魔者はいなくなったところで」
「…お前、俺とあいつの関係をどうしてくれる」
ファリエナはこちらをちらりと見るが、大して悪びれた様子はない。
「別にどうでもよかったんでしょ？」
「プライベートでは…確かにそうだが、仕事となると話は別だ」
「…と、とりあえず僕も邪魔？」
…すっかり忘れていた。
というより、墓穴を掘ったな、ファリエナ。
「ち、違うのよ？　私とカンリイは……」
「い、いいよ別に。ちょっとびっくりしただけだから。
…じゃ」
慌ててファリエナがレステアの腕をつかむ。
「違うのよ。本当にカンリイとはそうじゃないの」
「…本当に…いいって」
「違うのよ！　私はあんたのことが――」
「レーダーに敵影確認！
雷撃艦十五隻、航宙艦五隻が角度二百四十度で接近中！
至急、各乗組員はフェイス２にて待機！」
…空気が読めていなかったようだな。
いや、間が悪い、と言ったほうがいいか。
「出撃だ。お前ら。
レステア、ファリエナの言っていることは事実だ。信じてやれ」
「…うん。二人ともそういうなら」
ファリエナが悔しそうに下唇を噛んでいる。
…ま、頑張れ。
「敵に捕捉されていない可能性は！」
「５０％です！」
五分五分…か。

戦艦一隻一隻で比較すればこちらの方が性能は低い。
先手を打たなければ、基本的にこちらは負ける。
「ヴァルキリー至急発艦させろ！
敵航宙艦全滅を確認するまで各艦は密集隊形で対空用意！
確認後、全砲台一斉砲射！」
「了解！
全艦長に通達！」
信じてるぞ。三年四組。

「あああっ！　もう！
こんなに無茶させる作戦立てて！」
至急、ということもあって、ちゃんと宇宙服を着れていない。
背中にあるシワを気にしながら走る。
「この前より活躍できそうだね」
「ドッグファイトは好きじゃないの！
とくにあんなハエみたいなやつを撃ち落すのはね！」
ハエみたいなやつ、っていうのは、ジャシルタのことだろう。
敵主力航宙機ジャシルタ。
銀河連合軍にある全航空機、航宙機にはない、突進攻撃をする。
別に特攻っていうわけじゃないけど、とにかく戦艦撃墜能力は高い。
戦闘形態にはいると速度は亜光速を超え、戦艦を貫く。
まさに弾丸。
それに、亜光速以下の弾丸はなぜか直撃しない。
速度は航行速度でもこっちより速い。
でも、なぜかは知らないけど、それ以外の攻撃方法は一切持ってない。
他の戦艦の対空攻撃が強力なせいで、ドッグファイトを考えて設計されてないのかもしれない。
どっちみち、僕達がどうにかしないと、ほぼ確実に一隻はやられ

る。
うまい奴だと一回で四、五隻は沈む。
「ぼーっとしながら走ってると、転ぶわよ！」
「・・・ん？　うん」
ファリエナがため息をつく。
「ほんっとに、あんたは私がいないとどうにもならないわね」
「じゃ、ずっと一緒にいてよね」
「…え？」
格納庫についた。起動は済ませてある。
乗り込むとハッチを閉める間もなく機体が移動しはじめる。
「ヴァルキリー、ＴＭＯＶカタパルトへと移動開始！」
あわててハッチを閉めると、やっぱり直らなかった背中のシワのせいで居心地が悪い。
何度も座りなおす。
「カタパルト発射まで、３、２、１…はっ……」
「発艦」の文字が聞こえる前に重力で目の前に星が飛ぶ。
緊張が、今頃になってやってきた。
……
ファリエナからの命令がない。
「ファリエナ、どうしたの？」
「…！
ぜ、全部隊解散し、各機で戦闘開始！
向かってくるハエは残らず撃ち落とせ！」
「了解！」
僕の声しか聞こえない。
「つないだ？」
「…あー、もう！　あんたのせいよ！
全部隊解散し、各機で戦闘開始！
ジャシルタは全て打ち落ちょしぇ！」
「「「「りょ、了解！」」」」

最後をファリエナが噛んだせいでクスクスと笑いが残った。
「あ、あんたのせいなんだからね！」
通信が一方的に切れた。
僕、何かした？
と、部隊を解散して各機がＴＭＯＶを解除して敵の方へと向かっている。
レーダーにはすでに敵航宙機が続々と映ってきている。
最前線はもう戦闘に入りそうだった。
僕は急いでＴＭＯＶを解除し、最後尾から味方の後を追った。

「ヴァルキリー、戦闘開始！」
「密集隊形が整いました！」
「全戦艦対空砲、撃ち方始め！」
色とりどりの砲弾が戦場へと吸い込まれていく。
「戦況は？」
「こちらの方が押してはいますが、やはり数が多いです」
「そうか・・・・…」
敵の航宙艦の航宙機推定艦載機数は五十五機。
こちら側は非生体空母艦が平均五十五機、半生体艦が平均二十機
単純に考えると四百七十対二百五十でこちらが勝っている。
だが、機体の性能上、こちらは一度に全機出すわけにはいかない。
相手の戦闘可能時間は推定二時間三十分。
こちらの戦闘可能時間は約一時間。
交代で出すような仕組みをとっているものの、実質戦場に出てる数で比べれば百二十対二百五十で圧倒的に不利。
だが、これくらいは跳ね除けてもらわないと困る。
いや、跳ね除けなければならない。
この先に待っているのはこんなものではない。

画面が異常を知らせる。

「…！」
旋回すると、そのままならいるはずだったところをジャシルタが突き抜けていった。
ジャシルタの通ったあとはなぜかその先に見える星の光が揺らめく。
でも、見ている場合じゃない。
亜光速弾を放つが、無常にも宇宙の中をまっすぐに突き抜けていった。
異常音がほぼ同時に重なって聞こえた。
勘だけを頼りに旋回すると、五機ものジャシルタが突き抜けていった。
その中の二機を亜光速弾が貫く。
「何もたもたしてんのよ！」
いつものファリエナだった。
やっぱり、こうでなくちゃ。
「ＭＪシステム起動！」
「使うの！？」
「ちょっとやられたのよ！」
ＭＪシステム……
ヴァルキリーの相互連結システム。
主に緊急時に使われる…けど……
「…ほんとに？」
「い、いいじゃないのよ！　そういう気分なの！
さっさとやりなさい！」
仕方なくＭＪシステムを起動する。
ファリエナの底部に移動して、同じ面を合わせる。
「連結完了」
機械音声がそう告げた。
「攻撃は私！　避けんのはあんたよ！」
「はいはい」

連結したままの戦闘は難しい…らしいけど、僕達にとっては二人三脚より簡単なことだ。
むしろこっちの方が戦いやすい。
機体が大きくなっても、二人乗りだと扱いやすいからだ。
「十五機目！」
連結してから敵の攻撃が一気に増した。
無理もない。
僕達は…自慢じゃないけど…銀河連合軍内一の功績を持っている。
そのせいか、敵側にはかなり知られてるらしく、最近は特に僕達に対する攻撃が激しくなってきている。
最も、連結しないと気付かれないんだけど。
「二十！　二十二！　やりぃ、五連ちゃん！」
たまに飛んでくる雷撃艦のレーザーを利用してジャシルタを散らせる。
今日はいつもより調子がよかった。
「かき混ぜるわよ！」
「わかった！」
敵艦隊にまっすぐ突っ込んでいく。
雷撃艦のレーザーが激しくなっていくけど、それにつれてジャシルタの数も減っていく。
「前の航宙艦を潰すわよ！」
「うん！」
航宙艦の縦のラインに機体を合わせ、機体を斜めにするようにして二機の赤電苛粒子砲を当てる。
航宙艦を過ぎたところで機体を旋回させ、今まさに開こうとしているカタパルトに向けた。
「「発射！」」
赤い光がカタパルトの中へと吸い込まれていく。
そして、音が聞こえるわけもなく航宙艦が爆発した。
「次！　右の雷撃艦！」

「うん！」

…頑張りすぎだ。お前ら。

「ファリエナ、レステアが四隻目の雷撃艦を撃沈しました」

出る幕もないとは、まさにこのことだ。

だが、あいつらの残弾と燃料もやばい。

「対空砲火止め！

全艦、主砲へ装填！

ヴァルキリーの撤退命令を出せ！」

「了解！

全ヴァルキリー、戦線を離脱してください！」

一斉に点が離れていく。

「安全を確認！」

「全艦主砲、放て！」

# Ｅｐ．ＩＶ　生物艦艦隊戦

## Ｅｐ．ＩＶ　生物艦艦隊戦

「…このくらい…かな」
僕は最近まずい、と言われ続けている、コーヒーを作る練習をしていた。
やっぱり、作ってあげるならおいしく作ってあげたい。
「…僕的には上出来なんだけどなぁ……」
空気には万全を期してるからなかなか食物は腐らないけど、いつ壊されるかわからない戦艦の中に高い豆を入れてはおけない。
安い材料と安い器具でおいしいのを淹れるのは、なかなか難しい。
メーカーを限定して、最高の組み合わせを探すしかない。
…とか何とか言ったって、きっと伝わらないと思う。
「…あの……」
「うわっ！」
後ろからシューエが見ていた。
「あっ！　す、すみません！」
「い、いいよ。別に」
何だか、悪いことをした気分だ。
「…一杯、頂けますか？」
「ああ…でも……」
カップ一杯分のコーヒーが出来るにはもう少し時間がかかる。
でも、持っていく必要があるほど時間はかからない。
「もうちょっと、待ってて」
「…わかりました」
シューエが休憩室にあった椅子に腰を下ろす。
そして、椅子を僕の近くに寄せると、落ちるコーヒーの一滴一滴をじーっ、と観察しはじめた。

「……」
滅多にない機会だから話してみようかと思ったのに、これでは話せるわけもない。
シューエは腕を組んで机の上に乗せると、その上に顎を置いてさらにじーっ、と観察しはじめた。
「…楽しい？」
場の空気（というより僕の個人的な空気）を保とうと、何とか声を出した。
「…おもしろいです」
顎で頭を支えているため、話すたびに頭が上下する。
「…どこが？」
「…んー…水滴が」
…あんまり答えになってない。
シューエって知的なイメージがあったけど、意外とこういう天然っぽい…っていうより、子供っぽいところもあるのかもしれない。
「…おもしろいですよ？」
「…そう？」
僕も椅子を引っ張ってくると、同じような姿勢で眺めはじめた。
厚い耐熱ガラスのせいで落ちたときの音は聞こえないが、どことなく聞こえてくる感じがする。
最初はゆっくりだと思っていた水滴が落ちてくる感覚がどんどん短くなっていって、ついには八秒単位で落ちてくるような錯覚に陥った。
「……」
「……」
頭の中には聞こえてくるはずのない、水滴が落ちる音が聞こえている。
完全に心を乗っ取られた感じ。
ずっとこのままでいたい。
「…な……」

ファリエナの声が聞こえた。
きっとこれも錯覚だろう。
「…なに…やってんの？」
なかなか本音をつくことを言う。
確かに二十代も後半に入った僕たちがこんなことをやっているのは、確かに変な構図だ。
でも、どうでもよくなっていた。
「…聞いてる？」
頭に軽い痛みが走った。
そろそろ体が警告しているのだろうか。
それ以上行ってはいけない、と。
でも、どうでもよくなっていた。
「…一人で何やってんの？」
…一人？
「え？」
一瞬でわれに帰る。
そこにはゆうに五杯分はたまっているコーヒーと、ファリエナの姿があった。
シューエの姿は無かった。
「あれ？　シューエは？」
「シューエ？　そこで本読んでるけど」
タイムスリップした気分だった。
異次元にいたのかと考えるほど。
「あれ？　コーヒー……」
器に触れるととっくに冷めている。
時間を確認すると、なんとゆうに一時間弱はこれを見ていた。
「何やってんのよ。ほんとに」
そういってファリエナは冷めたコーヒーを注ぐ。
「それ……」
冷めたコーヒーなど、おいしいわけがない。

また吹きかけられる。
「…うまいじゃない。完全に冷めてるけど」
「え？　それブラックじゃないの？」
たとえ冷めたとしても、何もしていないのだからブラックのはず。
一番最初にファリエナにブラックを注いだときは、吹きかけられるどころじゃなかった。
「何言ってるの？　砂糖入ってるじゃない」
僕は近くにあったカップにコーヒーを注ぐと、飲んでみた。
僕の好みじゃないけど、確かにおいしい。
今までに作ったことのない味だった。
「ほんとだ……」
「何を言ってんだか。自分で入れたに決まってるくせに。
ま、うまけりゃ私はどーでもいーけど。
これ、冷蔵庫入れとくわね」
そういってそのまま冷蔵庫の中に入れた。
「さてと。また副艦長でもなじってくるとしますか」
そう言ってファリエナは出て行った。
僕も立ち上がろうとする。
「いっ！」
変な体勢で長時間座っていたため、足が痺れている。
正座は慣れてるはずなのに……
「う…うあ……」
僕は無理やり立ち上がると、悶絶しながらシューエの元へと向かう。
シューエがいる机までの距離がやけに長い。
「…シューエ？」
助けを求めようと思ったのに、本に集中しているせいでこちらを向いてくれない。
仕方なく自力で反対の椅子に座った。
「…なんですか？」

本に目を向けたまま、今頃返事が返ってきた。
本に集中したいだけらしい。
「あのさ、コーヒーに味付けしたのって、シューエ？」
「…秘密ですっ」
どこかの魔法少女のような声を出す。
少し驚いた。
「でも、どうやって？」
ずっとコーヒーが垂れるのを見ていたのなら、砂糖なりなんなりが入ってくるのが見えたはずだ。
「私、付属能力が幻覚なんですよ」
付属能力……
ＳＣ値に関わらず、ある一定の確率でＳＣ能力者に精神通信以外の能力が現れることがある。
ちなみにギャルシュは念力を持ってるけど……
「そうだったんだ」
「その人が発動する前まで見ていた映像を繰り返すことしかできませんし、体に何かが当たったりしたぐらいで解除されますけど」
ＳＣ付属能力は戦闘時どころか実生活でもほとんど役に立たないものが多いって聞いたけど、これでは本当に役に立たない。
シューエがそれについて言う必要もなかった。
「どうしてあんなにおいしいのを？」
きっと、家が喫茶店だったりしたのだろう。
「あ…えっと……」
シューエが本から目を離してまで返事をしようとしている。
何か言えないわけがありそうだ。
「言えないなら、別にいいけど？」
「あ、いえ。その・・・コーヒーは子供のころからよく飲んでいたので、味がわかるだけです」
「…ふーん」
今、理由を思いついたような言い方だったけど、話をこじらせる

のも悪い気がしたのでその理由で納得しておいた。
「さてと…僕もシュミレーションで少し飛んでくるかな」
「あ・・・それなら私も――」
「レーダーに敵影確認！
雷撃艦十隻、生物艦五隻が角度百三十五度で接近中！
至急、各乗組員はフェイス２にて待機！」
シューエが本に枝折を挟んで立ち上がる。
「行きましょう！　レステアさん！」
「う…うん！」

「敵に捕捉されていない可能性は！」
「７５％です！」
生物艦を相手にこれ以上好ましい数字はなかった。
「全艦、現隊形を維持し敵艦隊に接近！
生物艦が槍を放ち次第、その時点での距離を維持しながら槍を迎撃！
攻撃が終了次第、反撃に出る！
念の為、カリーナのＦ２を準備しろ！」
「了解！
全艦、隊形を維持し敵に接近！
槍迎撃後、速やかに反撃へと移れ！」

「…遅かったわね」
そこには不機嫌なファリエナがいた。
別にゆっくり来たつもりはないのに。
「す、すみません……」
「シューエはいいの。レステアよ」
何で僕ばっかり。
「何で僕だけなんだよ」
「気に食わないからに決まってるじゃない」

僕とシューエのことを交互に見る。
何があったんだろ。
「そ、そんな理由って――」
「ええ。そんな理由よ。何か悪い？」
格納庫内に嫌な空気が漂い始める。
「ファリエナ、そろそろ――」
「分かってるわよギャルシュ。
ちょっと機嫌が悪かっただけよ」
本当に何があったんだろ。
でも、これ以上話しかけるのもマズそうだったから、声をかけるのはやめることにした。
と、いつもの宇宙服じゃないカリーナさんが来た。
「ひっさしぶりに私の出番かしら？」
通常の宇宙服よりもさらに服が薄くなっていて、ほぼ着ていないに等しい。
僕も最初の頃は目を背けていたほどだ。
…ＳＣを使うＦ２だから仕方ないのはわかってるけど、少し開発者の趣味を疑う。
カリーナのヴァルキリーには他とは違う特殊な装甲が至る所につけられていた。
「超範囲ＳＣ圧砕機…ねぇ……」
カリーナがいつも使うＦ２は紫電苛粒子砲。
でも、特殊時にはこの超範囲ＳＣ圧砕機を使う。
単純に言えば、範囲内にいる全ての生物を、ＳＣを使って脳死させる。
ＳＣが一万を超す人しか使えないし、敵味方関係なく殺しちゃうから味方もついていけない。
でも、艦隊を一つ壊滅させることができるほど、強力なＦ２だ。
「…他の艦の頑張りに期待するしかないわね」

「発射された槍の数は！」
「計五十です！
一斉にこちらへと向かってきます！」
生物艦が放つ「槍」。
その中には人を軽く超える大きさを持つ昆虫、セルリリスが実に数百匹も乗っている。
彼らは肉食であり、特殊な環境下で育ったためか、あるいは何か細工をされたのかどうかはわからないが、鉄の骨格を持っている。
人が扱う重火器ではまず撃退不可能であり、宇宙空間でも生存可能。
最低限、ヴァルキリーに登載するような武器でないと、倒すことはまずできない。
ＳＣによる撃退も可能ではあるが、何百匹といるため、全体の撃退は不可能。
槍に刺されたり、セルリリスに取り付かれた戦艦は、制圧が時間の問題であるため、艦を捨てて自爆させるしかない。
故に、絶対に通り抜けさせてはならない。
「射程範囲内に入った戦艦から攻撃を開始！
全力をもって撃退せよ！」
赤い光の線と黄色い光の点が飛んでいく。
「非生体主力戦艦、攻撃を開始！」
続いて、黄色い光の線が飛んでいく。
「非生体駆逐艦、攻撃を開始！」
しばらく八隻だけの攻撃になる。
そして、目の前が光の海になった。
「生体艦、半生体艦、攻撃を開始！」
凄まじい光の弾幕。
それでも、レーダーに映る槍は少しずつしか減らない。
「非生体護衛艦、攻撃を開始！」
除々に槍が減っていく。

しかし、数本ギリギリまで来るものもあった。
「全艦、迎撃しつつ後退！
生体艦は敵左翼、右翼に展開！」
半数以上がまだ残っている。
「雷撃艦、攻撃を開始！
展開した生体艦を撃っています！」
…やはりか。
だが、こうでもしないと非生体艦のほとんどを失ってしまう。
「生体艦は現地点を維持！」
大のために、小を捨てる。
いやになった。
だが、捨てる命の大きさはこの方が断然少ない。
そう考えて下唇をかんだ。
「第十非生体防御艦、槍の攻撃を受けました！」
その艦だけが赤く光っている。
刺さった地点は左防御翼端。
これならなんとかなる。
「第十防御艦を自動操縦に切り替え、中央に放置！
搭乗員の避難を優先！
残る艦は第十防御艦を避けつつ盾にし、陣形を整えながらさらに後退！」
見れば、残る槍も、少ないものとなっている。
「カリーナ発艦！」
「了解！
カリーナライギャラクシエア・ファジエナ、発艦！」
第四半生体艦から一つの点が飛び出す。
「槍の撃退を確認！」
「全艦、カリーナを援護！」
点が敵艦隊の中央へと接近する。
「ＳＣ範囲内に敵艦隊が入りました！」

「Ｆ２使用許可！」
途端に宇宙に波動が描かれる。
「Ｆ２使用を確認。
敵艦隊、完全に攻撃を停止しました」
「わかった。
第十防衛艦に照準」
後始末だ。
「放て」

# Ｅｐ．Ｖ　超撃艦艦隊戦

Ｅｐ．　Ｖ　超撃艦艦隊戦

「あっれー、レステアくん、シュエりんどこ？」
カリーナさんだ。
「わかりません」
そういうと、なぜか僕に寄ってきてほっぺたを突き始めた。
「んもぅ、いつになったらそれやめてくれるのぉ？　け・い・ご」
そういう言葉遣いだからこそやめられないんだけど、そんなことを言うわけにもいかない。
「あはははは……」
誤魔化すしかない。
「もしかして・・・そうなの・・・？」
「何が・・・ですか？」
カリーナさんは頬に手を当てて困ったような表情をする。
「困っちゃったわねぇ。レステアくんがそうなのは別にいいんだけど……
ファリエナちゃんもねぇ…私もそうだしねぇ…レステアくんもねぇ……」
何が言いたいんだろう。
カリーナさんがため息をつく。
「誰も報われないわねぇ……」
「何が…ですか？」
カリーナさんが僕を見る。
「あなた、私のことが好きなんでしょ？」
「…？」
…ええっと。
どこからどういったらそこまで飛躍するのかがわからない。

またため息をつく。
「まあ、モテる、っていうのは悪いことじゃないわよ？　悪いことじゃないんだけど……」
私は男からモテても仕方がないからねぇ……
ファリエナちゃんも気の毒ねぇ……」
ははは……
やっぱりこの人、本当にそういう趣味の人だったんだ。
でも、なんでファリエナが気の毒？
「あの…まずはいろいろツッコまないで聞きますけど、なんでファリエナが気の毒なんですか？」
またカリーナさんが僕を見る。
「ああ…そうだったわねぇ。
あなたぐらい天然な女の子がいたらいいのに」
天然？
あなたぐらい？
僕って天然なの？
「僕って天然なんですか？」
「そういう風に聞く人が、天然なのよ」
うーん、いまいちよくわからない。
「ところでその…あのえーっと…カリーナさんが、女の子の方が好きになったのはいつからなんですか？」
「そうねぇ…パパとお風呂に入ってから…だったかしら。
まあ、その頃は『好き』とかそういう気持ち自体なかったけど、『アレ』を見て、こんなものがついてる人なんかと結婚したくない、って、
子供ながらにそう思ったからね。
…思い出しただけでも吐き気がする」
そういうものって意外とトラウマなんだろうか。
というか、そこまでの気分にさせたのなら、見てみたい気もする。
「それじゃあ、男全般が嫌いなんですか？」

「うんうん。今はほとんどそういうことはないわよ。
大丈夫。あなたとは友達でいいから」
微妙に傷つく一言だ。
「じゃあ、好きな理由は？」
「もちろん、あの柔らかい胸とお尻と太ももに決まってるじゃない！
男だって、そう思うでしょ？」
女の子の体に興味を持ったことって、あんまりないかも。
ましてや、そんな部分にはもちろん興味を持たない。
「どう…なんですかね」
「はぁ…あなたって本当に男？
ついてるの？」
いきなり恥ずかしい質問をしてくる。
「つ、ついてますよ！」
「別に、いいけど。ついてない方が逆にいいし。
天然ボクっ娘もなかなかいいわよね」
僕は、他の部隊の男の人からいろいろとカリーナさんについて尋ねられたことが数え切れないほどある。
どれも興味本位ではなく、完全に狙っているようにしか思えなかった。
同じ部隊にいることを疎まれたこともある。
でも、本人が言うに恋人は今までなし。
まさしく星の数ほどの男の人が散っていったことになる。
きっとカリーナさんのことだから、
「ごめん。私、女の子にしか興味ないの」
の一言で片付けるんだろうなぁ。
男の人からこんなにモテるのに、女の人を狙っている。
なんだかどちらもとても不憫な気がする。
「ああ…誰か私の魅力に気付いてくれる女の子っていないものかしら……」
「…アピールしすぎるからなんじゃないですか？

カリーナさんって悪い人じゃないし、好きな女の人も軍に一人くらいいると思いますよ？」
カリーナさんが僕の手をとる。
「ありがとう！　そう言ってくれてほんとに嬉しいわ！
よっしゃあ！　今日もその一人をゲットするためにがんばるわよ！」
カリーナさんがガッツポーツをとる。
正直言って、応援したらいいのかどうかわからない。
「まあ…頑張ってください」
「レーダーに敵影確認！
雷撃艦十五隻、未確認戦艦一隻が角度百度で接近中！
至急、各乗組員はフェイス2にて待機！」
毎度毎度、敵は空気を読んでくれる。
できれば来ないほうがいいんだけど。
「急ぎましょ。レステア」

「未確認戦艦の情報は！」
「はい。
戦艦の大きさはこちらの非生体ミサイル艦とほぼ同じ。
内部が空洞になっており、それをこちらにむけて航行しています。
こちらの非生体ミサイル艦と同じく、惑星系付近にしか配備できないものかと」
いずれにしても攻撃方法は不明。
一撃で壊滅させられる恐れもある。
慎重に行く必要があるな。
「非生体艦を全て本艦へと収容！
半生体艦、非生体艦は三次元空間移動の体勢を整え、本艦の後方へ！
防御艦は密集体制をとれ！」
「了解！

各艦、指示に従って移動してください！」
一点集中型の攻撃と考えての作戦。
もし、我々のようなミサイルを使う戦艦であれば、直接本艦を狙われてお陀仏だ。
艦の内部が空洞であるからその可能性は低いが。
「間もなく、敵の索敵範囲に入ります！」
その直後、雷撃艦の砲撃が始まる。
防御範囲が狭くなっているため、何発かがかすって艦内に衝撃を与えていくが、ここは少しレイに耐えてもらうしかない。
「未確認戦艦、高エネルギー収束中！」
「合図と共にダイブを頼む」
「了解！」
瞬間。
すさまじい光の渦が目の前で炸裂する。
モニター越しでなければ、明るすぎてとても目が開けられないだろう。
「ダイブ！」
生体艦たちが戦闘を始める。
はっきり言えば質より量の彼らに雷撃艦を相手にさせるのは荷が重過ぎる。
だが、半生体艦にいる彼らがいるならなんとかなる。

戦場からの出撃は久しぶりだ。
「3、2、1……」
すぐに散り散りになって各機で戦闘をはじめる。
ここまで敵との距離が近いと、母艦を守りながらの戦闘になってしまう。
ただ攻めにいくのと、守りながらの戦闘ではわけが違う。
航宙艦がないからまだマシなほうだけど、母艦を狙っている戦艦から撃沈させる必要がある。

それに、相手の方が射程距離も長い。
数分もかけずに倒さないと、母艦どころか、他の生体艦や半生体艦も危ない。
赤電荷粒子砲を敵のレーザー機銃付近へ向ける。
…一基撃破。
と、その艦自体が大爆発に覆われていく。
誰かが先にやったみたいだ。
「残念だったね、レステア」
ギャルシュとリボリアだった。
レーザー機銃程度ならリボリアで防げるため、多少の無理は利く。
完璧なチームワーク…違う、母子愛だ。
「あれー。先に私がやったと思ったのに」
カリーナさんだ。
ばらばらに行動しても、なぜか一緒になることが多いから不思議だ。
「全機撤退！
宙空衝撃弾頭ミサイルを未確認戦艦へと放ちます！」
生体艦たちは先にダイブして撤退した。
僕達はひたすら外に外に離れていくだけだ。
やがて敵の砲撃も来ないような場所にくると、僕達は帰還を開始した。
僕達の艦隊から何かが放たれ、それが多数の砲撃を受けながら未確認戦艦へと向かっていく。
と、そのあたりの戦艦や星の光が歪む。
幻覚ではない。
敵戦艦が瞬く間にただの鉄の塊に変わっていくのがわかる。
宙空衝撃弾頭ミサイル。
そう。
これは、空間を歪めることのできる銀河連合軍最強の兵器。
以前は強かったらしい核弾頭ミサイルも、すでに過去のものだ。

「各機、各艦に報告。
敵艦隊の撃墜を確認。
同時に、鼎皇文明同盟帝国主星星系内へと侵入完了しました」
いよいよここからが、僕達の正念場だ。
この艦隊で最後まで行くわけじゃないけど、それでも後に続く第二、第3侵攻艦隊の人たちが待っている。
シィーアからだって来ているんだ。
「銀河連合軍地球基地からの連絡船より報告！
惑星シィーアが、敵艦の攻撃により爆発！
シィーア側の侵攻艦隊も全て撃墜された模様！
犠牲者は約五十億人！
生存者は確認されていません！　繰り返します……」
…は？
惑星が爆発？
敵の攻撃で？
犠牲者五十…億人…？
…そんなこと…ある…わけ…ない・・・よ…ね？

## Ｅｐ．ＶＩ　オサナナジミ

Ｅｐ．　ＶＩ　オサナナジミ

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
やけに重い空気。
こんなの僕たちじゃない。
でも、
そんな声を上げるのは僕に許されてなさそうだった。
少しひどい言い方だけど原因は、ファリエナだ。
少しも泣いてないけど、泣くことを忘れるぐらい悲しいんだと思う。
ふと、シューエが立ち上がり、続けてカリーナとギャルシュも立ち上がる。
そして、何も言わずに部屋から出て行った。
ＳＣがあれば、何か声をかけてくれたんだろうけど、そんなことはなかった。
もしかしたら、みんなもＳＣで励ましていたのかもしれない。
でも、わからない僕にはわからなかった。
「…ファリ――」
「いいわよ。別に。慰めてなんかくれなくったって。
私なんかより、ギャルシュやカリーナを慰めてあげなさいよ。
故郷の星をあんなやつらに壊されたんだから」
悔しいけどもっともだ。
きっと、部屋を出てからどこかに行って泣いていたりしているに

違いない。
泣かなくて済むほど、心が強い人じゃないはずだ。
女の子なんだから。
「でも…僕はファリエナのそばにいたい」
「……
いっつもマゾっ気放ちながらみんなにイジられてるくせに、こういうときは頼ってもいい、って？
かっこつけてんじゃないわよ。似合いもしないくせに」
さっきからずっと顔を机から上げないせいで表情は全くわからず、近寄ることも怖い。
「でも――」
「でもじゃないのよ。こういうときに限って、いっつもしてないことやってるのがムカつくのよ。
早く消えてくれない？　こういうときは一人にした方がいいことぐらい、いくらあんたでも分かることでしょ？」
いつもと変わらない喋り方で自分を隠していることが見え見えで痛々しい。
こんな声なんか、聞きたくない。
「…嫌」
「はぁ？　あんたバカじゃないの？
いっつも女だの男だのって気にしてばっかりのくせに、反抗しないでよ」
僕が今取ろうとしている行動は、限りなく間違いだと思う。
でも、ファリエナならそれでもわかってくれる気がした。
逆にこれで無理なら、もう部隊としても、幼馴染としてもおしまいだ。
「…嫌だ」
「出てけって言ってるでしょ。
…殴るわよ」
「…嫌だよ」

「あんた、この期に及んであたしをバカにするわけ？
出てって」
「嫌」
「出て」
「嫌だ」
「出てってよ」
「嫌だよ」
……
動いたのはファリエナだった。
「出てけって言ってんでしょうがよ！」
ファリエナは勢いよく立ち上がると、僕に向かって走り出す。
そしてその素手を、頬で思い切り受け止めた。
「…っ……」
完全に本気だ。
僕のことをちっとも考えていない。
ファリエナがこんなに痛かったなんて、知らなかった。
「あんた…バカでしょ。バカ決定よ。
人に本気で殴られて、なんで何もしようとしないのよ」
僕はゆっくりと立ち上がる。
でも、ファリエナを見る前にみぞおちに膝蹴りが入った。
内臓が揺れて気持ちが悪い。
「おかしいわよ…あんた。
出てけって行ったら、素直に出て行きなさいよ！」
背中に回し蹴りを食らい、そのまま壁に叩きつけられた。
骨…折れちゃったかもしれないな。
「嫌…だ、よ……」
立ち上がる。
「その態度も性格も顔も全部…ムカつくのよおおぉぉ！」
目の前に白い閃光が飛ぶ。
壁に追い詰められてボコボコにされてるのがなんとなくわかるぐ

らいだった。
こんなことやって無事で済むかなぁ…ファリエナ。
「はぁ…はぁ……
これで…気は済んだかしら……」
気付けば床に座っていた。
僕はファリエナを見る。
そして、勢いよく立ち上がり、その勢いに任せてファリエナに対する全ての気持ちを込めた拳を放った。
「…！」
多分、届いたと思う。
外れちゃったけど。

痛みで目が覚めた。
こんなことは生まれて初めてだ。
「する前から言っておくけど、起きないで。ひどいから」
目だけを開けて周りを見ると、心配そうな顔、というよりむしろすごく落ち込んでいる顔のファリエナがいた。
まだ他のみんなは来てないみたい。
自分の体から薬品の匂いがした。
「する前から言っておくけど、相槌とか別に入れなくてし、聞かなくてもいい。独り言だから。
何か言うことがあったとしたら、言ってからにして。
「……」
「あたしってほんっとバカよね。あんたのこと怒鳴りたくなんてないし、殴ったりなんてましてしたくないのに、ただ単にどこかに何かを向けたいからって人に当たって。しかもそれがあんたで。さすがにここまでやると、どっちかが言えば私は格下げね。別にあたしのことなんか考えなくていいから。単純に人にあいさつを言う感じでさらっと言っちゃえばいいのよ。あたしは怒らないし、恨まないから。ま、あんたがやんなくてもあたしが自分で言うからいいけど

ね。ほんとバカだと思うわ。あたし。怪我させたのに自分で治療してるなんて。わっけわかんない。何したいのかしらね。あたし。ま、あんたもあんたなんだけどね。逃げたきゃ逃げればいいのに。本当に嫌だったのはどうせあたしから殴られたりすることなんでしょ？

わかってるわよそれぐらい。いっつもそんな顔しているもんね。あたしの機嫌を伺って。あたしのさせたそうなことして。あたしに従って。それを当たり前だと思ってたあたしもあたしなんだけどさ。何でこんな変な関係なのかしらね。昔からだけど。いっつもあたしが怒るのに、あんたが謝って。気付いてたのよ？　あんたがあたしは自分から謝らない人だって知ってること。それもあんたのせい、っていえばあんたのせいなんだけどね。なーんでこんなに素直になれないかな。あんたに言ってもしょうがないけど。でもさ、悪くないと思ってるよ。あたしは。あんたはただドMみたいに振舞わなきゃいけないから嫌だと思ってるかもしれないけど。ほんっとに何もなくぼーっと過ぎていきそうね。あたしたちは」

ちょっと悪いことしたかもしれないけど、独り言は聞いてなかった。

僕の方が言いたいことがあった。

「さてっと。

あんたのその様子だとほんとに聞いてなかったみたいだけど、何か言いたいことある？」

「僕は…僕はファリエナと一緒にいたいよ。

傍にいる必要もないし、離れていてもいい。

でも、僕はファリエナと一緒にいたい。

僕が何を言ってるのか自分でもよくわからないけど、とりあえず聞いて欲しい。

僕は、ファリエナが僕にしてほしいことなら何でもする。もうドMでも何でもよくなったから。

そりゃ、いつもみたいにひどすぎることには反対したりするよ？

でも、言いたいこととかあったら何でも言ってね。

解決できないと思うし、聞いてさえいないかもしれないけど。
こんな、関係なんだからさ」
その直後、ファリエナは僕の胸で本気で泣き始めた。
…痛いなぁ。

# Ep. VII 機動要塞戦

Ep. VII 機動要塞戦

「シィーアを破壊した戦艦の情報はまだ無いのか」
「…はい。
どうやら地球や火星にも伝わってはいないようです。
あくまで聞いた情報ですが、シィーアからの連絡船も相当な攻撃を食らっていたようです。
通信を伝えたあとに連絡船も搭乗員も亡くなってしまったようでして……」
「命を懸けて伝えた意味がある情報だな」
だがしかし。
破壊された情報のみではあまりにも少ない。
方法や戦艦の攻撃方法が分かっていないとすぐに打てる手は少ない。
「君はどう考える？」
うつむいた顔を上げて答えた。
「例の戦艦のことについて…ですか？」
「攻撃方法について、だ。
集団での飽和攻撃による破壊か、軍全滅後、核に向けて何らかの刺激を与えて破壊するのが妥当だが、それではあまりにも時間がかかる。
そこまでの時間があれば連絡船が来るのはもちろんのこと、こちらからも増援を送れたはずだ。
それならば、せいぜい数時間…いや、レーダーの探索範囲に入ってから数分で惑星を破壊しなければならない。
問題はその方法だ……」
俺もいくらか考えはある。

だが、こういうことは一人で考えてもあまりいい案は浮かばない。
「シィーアには地球ほどの大気があるわけですから、物理的な攻撃では破壊できません。
だとすると、核自体に遠距離から何らかの刺激を与えて破壊するか、それとも星自体をある程度の細かい部分にまで分解……
または大気を吸い上げて超高速弾を発射……
私達とほぼ同等の戦いをしている彼らが、そこまでのことをできるとは思えませんね」
まあ、妥当なところだな。
俺が考えたことと似たようなことだ。
だが、
この情報はでかいだろう。
「…ところで、ジャシルタの航行方法、及び攻撃方法の考案がある軍人から出されたのを知っているか？」
「…いいえ。初めてです」
「だろうな。私も昨日伝えられたばかりで、特に使える情報でもないから誰にも伝えていない」
上のやつらはこんな考えをめぐらせることすらできんらしいが。
「で、その考案というのは」
「要約すれば、ジャシルタの航行方法、及び攻撃方法は空間を移動させて航行することにある…だそうだ」
いっそう真剣な目に変わった。
「空間を…移動させて？」
「つまりは宙空衝撃弾頭ミサイルの原理をそのまま航行に生かしたわけだ。
機体が触れている宇宙空間、またはその周囲の空間を後ろへと流すことによって、航行し攻撃する、というわけだ」
「…物理的障害は全くの無駄ということですか。
どうりで弾が当たりにくいわけです」
理解が速くて助かる。

「そういうことだな。
これは完全に私の意見だが、航宙機に搭載できるほど小さくなっているということは、こちらが空間衝撃装置を完成させる以前にこの装置を発明したのだろうな。
つい数年前の技術が相手側にとってはすでに過去、とは驚いたものだな」
「ですが、こちらは重力関連の技術は上とされていますから」
そうだ。
土星や木星に基地を作れたのも、これがあってこそだ。
「話が少しずれたが、つまり私はこう考える。
惑星を破壊したのはそれではないか、と」
「何か空間移動装置のようなものを搭載した巨大な何かで星を貫く…ですか。
惑星に穴を空けるとは、すごいものですね」
あくまで仮説に過ぎないが。
「まあ、ここで私達がいろいろ議論したところでそれがあちら側にあって、対処する方法があまりない、というのが現状だな。
奴らはそんな装置を持っていながら、シィーアにある全戦艦を相手にして戦った。
これに奴らは相当な力を割いているに違いない。
これを抑えられるかが、一番の鍵だな」
ある程度冷ましておいたコーヒーをすする。
こ…これは……
「ど、どうでしょうか？
レステア航宙機隊隊員やファリエナ航宙機隊隊長にいろいろ…その…指揮官の好みを聞いて作ってみたのですが……
お口に…合いませんか…？」
ファリエナにコーヒー作り続けて七年目のレステアとほぼ同じ味を出している。
しかも、ファリエナ用のものではなく、俺用のものと。

それぐらいの味の違いはレステアにもファリエナにもたっぷり飲まされたからわかる。
これを出すために、相当努力したんだろうな……
「…あ…ああ…おいしい」
「そ、そうですか！
ありがとうございます！
指揮官のために頑張った甲斐がありました！」
こんなに……
こんなに俺のために尽くしてくれる人がこんなに身近にいるのか。

――お父様。よかったですね。

「だ、誰だ！」
シェイシア副艦長があわてふためく。
「ど、どうしましたか？」

――いやですわお父様。私です。レイです。

レイだったか。
すっかりこいつの中にいることを忘れていた。

――急に話しかけられたらびっくりするじゃないか。
――お父様にもついにこの季節が巡ってきましたか。娘として、とても嬉しく思います。

「娘」といざ言われると微妙に違和感がある。
どちらかといえば「助手」に近いところがあったからな。

――何の季節だ。
――子離れの季節です。

子離れ？
俺はギャルシュのように親バカやってるつもりはないが。
――それで気付かれないなんて、シェイシアさんがかわいそうです。
――何が言いたいのかさっぱりわからないぞ。
「どうか…されたのですか？」
「いや、交信をしているだけだ」
――ファイトです。お父様。
――何が言いたいのかよくわからないが、お前が言うことだから頑張ることにするぞ。
「誰とですか？」
「レイとだ」
二重交信はあまり得意ではない。
頭がこんがらがる。
――そろそろ私も親離れしないといけませんかね。
――どうしてだ？
「誰ですか？」
「ああ…娘だ」
――キスとか、抱き合うとか、ましてや生殖なんてできません。
でも、恋は誰でもするものです。
――そうか……

なんだか少し悲しくなってきたような気がする。
俺もなんだかんだで少しは親バカだったのだろうか。
「し、指揮官は子持ちなんですか？」
「いや、生体艦だ」

――相手はいるのか？
――ええ。います。リボリアです。

「リボリアだと！？」
「な、何ですか？」
我に帰る。
「…いや、すまん。
交信が思わず口に出た」

――そ、そんなに驚かないでください。
――どこがいいんだ？
――甘えてる姿が…かわいいんです。

確かにレイのことは愛しているのだと思うが、レイでさえかわいいなどと感じたことはない。
やはりそこは種の違いなのだろうな。
ギャルシュはそこさえも超越しているが。

――そろそろ失礼します。お邪魔になると悪いので。

交信が途絶えた。
「そろそろ…失礼させていただいてもいいですか？」
「ああ。それと……」
何だろう。
ものすごく言いにくい。

「気が向いたら…また作っ――」
「地球基地からの連絡船より入電！
間もなく、艦隊は敵機動要塞監視区域に入ります！
各艦長、及び各隊長は各艦のブリーフィングルームに集合してください！」
…途切れてしまった。
「どうか…しましたか？」
「いや…いい。行ってくる」
「い…行ってらっしゃいませ」
そうぎこちなく言ったのが少し、耳に残っている。

部屋中のモニターに各員の顔が映る。
この部屋に入るのは久しぶりだった。
「まず、戦闘を行う可能性の高い敵機動要塞の規模などを伝えてくれ」
「はい。
同盟帝国軍がアンチジャミングをかける約二百五十年前、ほぼ全ての機動要塞の規模は現在の土星軌道上機動要塞オーバニスラとほぼ同じ程度でした」
土星の第七機動要塞か。
そこそこだな。
「現在の予測は」
「偵察船によると、敵主星星系内の軌道上機動要塞はほぼ全て、木星軌道上機動要塞ホープと同じ程度です。
が、今回戦闘を行うのは独立型機動要塞と思われます」
独立型機動要塞か……
星系内を自由自在に動き回る、最高の警備。
だが、単体での能力は他に類を見ない。
あまり自由に動けない惑星軌道上機動要塞とはわけが違う。
「敵の独立型機動要塞はほぼ独立型機動要塞シャクナゲ程度の規模

と思われます」
火星、木星間を移動するシャクナゲと同じ規模だと？
地球への侵攻の際の最低でも第二関門となる独立型機動要塞だぞ？
「作戦は…どうする」
「作戦を考える前に、撤退を考えた方がよいのでは？」
第二護衛艦艦長か。
「私個人的にもここは一旦退きたいところだ。
だが、シィーアの破壊が行われた今、たとえ双方の惑星が滅びることになろうとも、ファーリルの破壊、または占拠をしなければならない。
その足がけとなるために、敵主星星系内に侵攻しておきながら、みすみす下がるわけにもいくまい。
それにまだこの艦隊にもあまり犠牲者はなく、どの非生体艦も撃沈されてはいない」
「もっともな意見だと思います」
…ファリエナか。
また変なことを言い出しそうだ。
「犠牲者が出ているのは、我々航宙機隊数名のみ。
他の隊や戦艦も全くといっていいほど損害がないのに、死ぬのが怖い、という理由で退いてしまうのは、軍人として最も恥ずべき行為だと思います」
…余計なことを。
お前らのせいで俺がいったいどれだけやきもきしながら胃を痛めているのかわかっているのか。
臓器の年齢は四十後半って言われたんだぞ。
「ほう。最も恥ずべき行為…と。
ならば、あなた方なら、たとえ特攻してでも敵機動要塞を撃沈させる覚悟がある…と？」
「もちろんです」
そろそろ、年齢的にも誘われていることを理解したほうがいいん

じゃないのか？
お前はその最も恥ずべき行為を実際に受けているんだぞ？
「ならばどうでしょうか、航宙機隊に全てを任せてみるのは。
二百五十機のヴァルキリーでどこまでできるか…みものですな」
「私もそう思います」
「私もですな」
くされオヤジ共が。
結局は死にたくないだけかよ。
後も俺達より無いくせに。
「航宙機隊隊長…了解願えますか？」
次に来る言葉が分かっていても、祈った。
「もちろんです」
祈りは通じなかった。

「レーダーにこちらに向かってくる巨大物体の反応有り！
隕石の可能性は極めて低いと思われます！」
…今は祈るしかないか。
「艦隊は現態勢を維持！
各艦ヴァルキリー第一部隊、発艦準備！」
「了解！」
戦果は期待している。
だが、命だけは捨てるなよ。
「各艦、ヴァルキリー発艦準備完了！」
「ヴァルキリー、発艦！」
「了解！
ヴァルキリー、発艦です！」

こういうのは、残念なことに初めてじゃない。
ファリエナのたった一言で他の人まで巻き込むことは戦闘に関係があるなしに関わらず、結構あることだった。

もう少し、威厳とかそういうのを持ってくれればなぁ……
「…何か言った」
「話す意味も無いでしょ。わかりきってるくせに」
途端に耳を塞ぎたくなるほどの轟音が襲う。
「わかってるわよそのくらいぃ！！
あの糞オヤジ共が悪いに決まってんのよぉ！！」
ファリエナはまだ僕と同じ二十五歳なのに、こんなに重い役職に就いている。
もっとも、他の艦隊だとほとんどが部隊長止まりだけど。
性別の差っていうのは結構無くなってきた方だけど、年齢の差はまだなくなってはいない。
たとえ、三年連続航宙機撃墜数一位、そして今年はそれに加えて戦艦撃沈数三位の腕でも、やっぱり認めてもらえてない。
軍に入る前、ファリエナは。

――女だって、若いやつだって、腕さえありゃなんとかなることなのよ。軍ってところは。

なんて言ってたけど、そうそう甘いものじゃなかった。
同性からいじめを受けたりすることは無いけど、偉い役職の男の人からは、あんまりいい目で見られてなかった。
…体を売って昇進している、なんていうデマが一時期飛び交ったぐらいに。
今回も、前回も、前々回も、同じような流れでなったものだった。
同情はするけど、周りを巻き込むともっと悲惨な目に遭うことがあるからなぁ……
「…いいわよ別に。
わかってるから。
ほら！　集中しなさい！」
そのとき、警報が鳴った。

前からだ。
僕は機体をそらすとそれを最低限の移動で避ける。
でも、警報は鳴り止まなかった。
前のモニターに映るカウントダウンは、何十にも重なっていた。
「こんなに遠距離からこれだけの弾を飛ばしてくるなんて、あんたバカじゃないの！？」
ファリエナに答えている余裕はあんまりない。
「全機、紫電荷電子砲の射程が敵に定まり次第、一斉に弾幕を張ります！」
敵への攻撃…っていうよりは単なる防御だと思う。
でも、そうでもして隙を作らないと、最低限、突破は不可能だ。
「全機、放て！」
紫の光が機動要塞に向けて放たれる。
そして、その隙を狙って全員が最大加速で飛ばした。
ここまで接近すればさすがに……
「ヴァルキリー各機に通達！　敵機動要塞よりジャシルタが出現！
敵数、現在約百！」
やっぱり。
これで砲撃は少し止むと思うけど、これはこれできつい。
「敵のカタパルトは開いてるのね？」
「はい！　開いています！」
「レステア、聞いたわね？」
…嫌な予感がする。
でもまぁ、確実…かな。
「まあ…ね」
「あんたは今からバックで航行。逆向きでＭＪシステムを使うわ。
大丈夫。そこらへんのところは行く前にちゃんと頼んであるから。
そして、あたしたちが減速しながらカタパルトに入ってあたしの燃料を低速でパージ。
あとはカタパルトを出来るだけぶっ壊しながら全速力で脱出、ね

？」
バックでこの弾幕の中を避けるなんて無謀すぎる。
でもまぁ、仕方ないかな。ファリエナの言うことだから。
「了解」
「ありがとっ」
成功しても、しかられるんだろうなぁ。また。
「これより、生四一、生四二のＭＪによる機体接続を行います！
生一から生五までの部隊は、援護を頼みます！」
「「「了解！」」」
僕たちの周囲を十数機のヴァルキリーが飛び回る。
ファリエナが近づいてきた。
正しい向きなら多少ズレてても大丈夫だけど、反対だとシステム自体のロックを外しているから慎重にやらないといけない。
速度と進行方向に細心の注意を払いながらファリエナと合わせる。
「…来て」
「…うん」
僕がＭＪシステムを起動。
接続はうまくいった。
「引き続き、援護を頼みます！」
「「「了解！」」」
逆に接続したために、重心そのものがズレて正常な航行がかなり難しい。
下手をすればその場で回転を始めてしまう。
「行くわよ！」
「うん！」
急激にカタパルトに向かって旋回し、機体の進行方向が若干あやふやになる。
「減速開始！」
入るぎりぎりのところで僕がほぼ最大出力で無理やり減速させる。
後ろを向いているから、どこらへんまで深くきているのかわから

ない。
「パージ完……」
燃料がなくなり、ファリエナの通信が途絶える。
僕は機体全体を上向きにし、ブースターを上に向ける。
あとは、運頼み。
「カタパルト付近にある機体は、速やかに退避してください！」
出れた。
そのまましばらく航行すると、一旦ファリエナを離し、とんぼ返りして正しい向きに接続した。
そして、ファリエナに燃料を少し補給する。
「…うまくいったみたいね」
「うん」
爆発は表面でしか起きていなかったが、それだけでも十分だった。
敵の武器がなくなれば、撤退してくれるはずだ。
「敵機動要塞が撤退を開始！
航宙機は速やかに帰艦してください！」
「「やったね！」」

# Ep. VIII　惑星要塞戦

Ｅｐ．ＶＩＩＩ　惑星要塞戦

「敵艦隊確認！
総隻数三十！
内、雷撃艦十五隻、超撃艦五隻、生物艦五隻、航宙艦五隻です！」
全く・・・・・・・
機動要塞を撃退した後、一日たりとも休めた日はない。
最近は星で一日過ごすことがないため時刻がどうなっているのかは忘れたが。
「防御艦を前に出して艦隊への攻撃を防ぎ、航宙機と生体艦を先に出させろ。
槍を優先的に撃墜し、航宙機、生体艦退避後、宙空衝撃弾頭ミサイルを超撃艦に放ち、敵艦隊を一掃する。
第四護衛艦は弾頭ミサイルを予め装填しておけ」
「了解！　各機――」
疲れている。
艦隊全体が。
撤退したいのはやまやまだが、こんなところで退いてはだめだ。
指揮官なんて仕事はいつ来るかわかったもんじゃないし、まだ戦艦自体は損傷も大して多くはない。
艦隊を奮い立たせるような言葉でも言ってみたいものだが、そんな賢さは俺にはない。
「残る宙空弾頭ミサイルの数は」
「残り六発、五発は本艦に格納中、一発は護衛艦に装填中です！」
三十六発あった弾頭ミサイルも今ではこれだけか。
中枢都市を丸ごと消し去るぐらいはできるか。
・・・艦隊が持てば、の話だが。

僕たちの部隊は、戦闘続きで少し疲れはあったけど、他の部隊や搭乗員から比べればかなり元気な方だった。
「いよいよ敵さんも三十隻も出してきたのね」
「合計すると八十隻以上もほぼ無傷で撃沈してるからね。
そろそろ本気を出しても悪くないと思っただけだと思うよ」
球状感応センサーに指を置く。
「カタパルト発射まで、3、2、1…はっか……」
体が自由になると、もう一度座りなおす。
「諸君らに、迅速かつ最大の戦闘を期待する！
全部隊、続け！」
「「「了解！」」」

「敵艦が航宙機に対し、砲撃を開始しました！
予測より、だいぶ離れています！」
ここに来て狂ったのか？
タイミングをもう少し読んでほしいものだ。
「艦隊全速前進！
索敵される前に敵を射程範囲内に入れろ！」
「了解！
艦隊、全速前進！」
興奮しているのか、から元気が出てくる。
「航宙艦より、ジャシルタの発艦を確認！
こちらに向かってきます！」
「生物艦より、槍の射出を確認！
扇状に展開しています！」
「超撃艦のエネルギー収束を確認！」
総攻撃か。
臨むところだ。
「全艦速力減少！

防御艦を外に扇状に展開！
第三、第二護衛艦はジャシルタの迎撃、その他は槍の迎撃を最優先しろ！」
「了解！」
艦隊が俺が指示したように広がっていく。
「超撃艦、来ます！」
艦に若干の振動が伝わる。
「本艦の上後翼部先端損壊！
航行可能レベル５です！」
また、辛い思いをさせたか…くそ。
「生物艦の射出が完了したようです！
射出された槍の本数は計四十七、内五本を迎撃です！」
「ジャシルタ八機、攻撃体勢に入りました！」
他の艦が貫かれる。
「第五半生体艦撃沈！
第三、第四主力戦艦、第一、第二護衛艦、第四駆逐艦居住ブロック、第三駆逐艦左翼二箇所損壊！
第三駆逐艦は航行可能レベル３に低下！
被害を受けた艦艇は、既に処置済みです！」
一気に百五十人が死亡…か。
だが、考えるのは後でいい。
「現在出現している槍、及びジャシルタの全機撃墜を確認！」
「退避命令を出せ！」
「了解！」
「敵惑星接近！
残り６００で射程圏内に入ります！」
二連続で戦闘か。
いや、こいつらはいわば囮か。
「各ヴァルキリー第二部隊は出撃準備！
第一部隊の収容は後で行う！

宙空衝撃弾頭ミサイル、発射！」
「了解！」
ミサイルが発射されるのが視界に入った。
「惑星の詳細は！」
「地表温度約－１３５℃、大気はほぼありません！
規模は火星の約五倍です！」
直接攻撃による破壊は難しい。
だが、大気がないなら……
「全主力戦艦、第一護衛艦、第一から第四防御艦、及び本艦を惑星より１ＭＩまで後退！
他の艦は惑星へとこのまま前進！　射程範囲ぎりぎりを保ちながら本艦を含む別働隊の護衛を行え！
全主力戦艦は重力相互発生装置搭載弾を全砲門に装填！」
「了解！」
いよいよこれを使うときが来たか。
重力相互発生装置搭載弾。
銀河連合軍における、初の対惑星用砲弾である。
一方に半重力発生装置を、もう一方に重力発生装置を搭載した砲弾であり、各重力装置は地球の約五千倍の重力を発揮するものである。
重力によって加速するため、ある程度の距離は必要になるが、１ＭＩ、地球と月の距離で発射すると片方につくころには約秒速５０００００ｋｍに達し、その勢いで惑星を貫く。
人類の最高兵器ともいわれるものである。
「戦闘艦隊、再航行を開始しました！」
済まんが、がんばってくれよ。

第一部隊の仕事が終わってしまえば、僕らはぶっちゃけ暇だ。
宇宙空間だから戦闘の音はしないし、攻撃が当たりさえしなければかなりリラックスすることができる。

「他の部隊って、いっつもこうして待ってるのよねぇ」
「第二まで回ったこともあんまりありませんからね」
どちらかというと、銀河連合軍は全体的に短時間決戦、もっというと電撃決戦に向くように全体が作られている。
これは、消耗戦向きな鼎皇軍と戦闘をするときに有利でも不利でもあった。
ちなみに、どれだけ鼎皇軍が消耗戦向きかというと、建設中の機動要塞が襲われ、連合軍が中に篭ったときに、丸二日間もの間、雷撃艦がこっちの戦闘速度と同じ速さで周りを巡回していた、という記録が残っているほどだ。
「残り五分…何とかなりそうね」
部屋の小さなモニターには二つの数字らしきものがカウントダウンを続けていた。

「第一駆逐艦右翼部、被弾！
航行可能レベル、3から2に低下！」
防御艦もこれほどたくさんの攻撃はさすがに防ぎきれず、全艦艇が航行可能レベル4から2という状況。
あと一分…あと一分で……
「艦隊後部小惑星帯より、超撃艦出現！」
くそっ！　ここにきて……
小惑星帯の警戒が、まだ甘かったのか…！
「全ハッチオープン！　艦艇の収容を急げ！」
「超撃艦のエネルギー収束を確認！
間に合いません！」
くそっ…判断ミスだ…！
「全別働隊艦体、緊急回避行動！
全搭乗員、対ショック体勢！」
モニターのエネルギー収束は止まってくれない。
ここまで…か……

「攻撃、来ます！」
地震が、艦内に伝わる。
終わるの…か……
しかし不幸なことに、揺れは数秒で治まってしまった。
「第一護衛艦、撃沈！
第一から第四防御艦、エンジン部損壊！　航行不可能！
本艦は右舷上部半壊！
全主力戦艦は無傷です！」
実質五隻もの非生体艦が撃沈…痛すぎる。
「目標地点まで残り二十！」
「重力弾再装填！
戦闘艦隊に緊急退避命令！
全艦、対重力弾装置作動命令！」
非生体艦が射線上から遠ざかり、半生体艦と生体艦がこちらにダイブする。
「目標地点到達！」
「敵戦艦二十隻出現！」
「全艦、退避を継続！」
くそ…まだ退避できてないのか……
「全艦、射線上、及び被弾地域からの退避を確認！」
「相互重力発生装置搭載弾、発射！」
出てきた艦隊を貫通して弾が惑星へと突き刺さり、惑星が爆発する。
見たのは初めてだった。
星がはじけ飛び、無数の隕石となって散っていく。
これで周囲の星にも甚大な被害が出るはずだ。
一つの惑星と４３２名の命。
どちらが軽いかなんて、俺にはわからない。

# Ｅｐ．ＩＸ　遭遇

Ｅｐ．ＩＸ　遭遇

「撃墜隻数二、投棄隻数四、航行可能レベル５の戦艦四隻、レベル４の戦艦十四隻、レベル３が十七隻、レベル２が一隻。
たった一度の戦闘で、このザマか…・・・」
敵が強かったから仕方が無かった、などという泣き言は言ってられない。
現に、目標の敵主星、ファーリルまでの予定距離はわずか３０ＭＩ。
第二侵攻艦隊は今しがた出港し、あと一日でこちらと合流する。
もう少し。
本当にもう少しでこの任務も終わる。
そうすれば、俺を含め、ほとんどが昇格し、さらに上を目指せる。
残酷だが、犠牲は構っていられない。
死んでいったやつらも、それは承知の上だ。
でも今は。
少しだけ休みが欲しい。

――レイ。
――…お父様。

かなり痛むらしく、その気持ちが心からあふれ出てくる。
無理も無い。
人間にとってみれば、腕を吹き飛ばされたも同然。
これで痛がっていなければ、むしろ不自然だ。

――いい。無理をかけるなら話さなくても。

――話しているほうが、安心できます。

入っているのはただの液体とも固体ともいえない、ただのどろどろの物体なのに、ここは一番落ち着く。

いわばここは、子宮と同じようなところなのだろうか。

――かけるのが遅すぎるが、大丈夫か？

――遅いだなんて、とんでもありません。大丈夫です。

レイの傷口は見てみた。

剥き出しな皮下脂肪が攻撃と紫外線で焼けているのがわかった。

今は機械で感覚を完全に遮断されている状態にある。

レイが受け取れるのは、ＳＣだけだ。

――辛くは無いか？

――私は辛くありません。だって、お父様が一番辛いはずです。

つくづく健気なやつだ。

――ありがとう。レイ。しばらくいてもいいか？

――はい。…いえ、だめです。みなさんの不安な感情が伝わってきます。行ってください。

――…わかった。

仕方がない。

行くしか…ないか。

ろくに髪も乾かさないまま指揮室に向かうのは、さすがに不快だった。

「どうした」

「レーダーに反応はありません…ただ……」
何を慌てているんだ？
「隕石ではない、直径八千ｋｍと思われる物体が本部隊の侵攻航路に接近中です」
重力に関係なく突き進んでいる、ということか。
「地点の特定は」
「ファーリル系より約１５０ＳＩ、秒速２ＭＩで接近中です。
十分後に物体が確認でき、一日後に衝突します。
方角は、進行方向に対し右に３５度、その先にシィーア系があります」
シィーアを滅ぼした戦艦…？
いや、そんなことはありえない。
作れるわけがない。
一番考えられるのは、未確認の戦艦による超大規模艦隊。
次に考えられるのは、新たな文明の参戦。
前者であれば連合軍本部に連絡し、対策を練る。
後者であれば戦闘はできるだけ避け、連絡後、対策を練る。
どちらにせよ、この艦隊だけで何かできる問題ではない。
「正体を突き止めてから対策を練る。
できるだけ詳細な観測を頼む」
「了解」

「接近中の物体を確認。モニターに出ます！」
モニターに画像が映る。
かなり画像は荒いが、確かにそれは確認できた。
巨大な鉄の壁。
しかし、それにはしっかりとした翼のようなものが確認できる。
紛れもない。
戦艦である。
しかも、鉄丸出しの戦艦から推測するに、鼎皇軍のもの。

「…通信用に生体艦を連合軍本部に送れ。今すぐに！」
「了解！」
不測の事態というのは起こりうるものだ。
こんなときに限って。
「敵艦の大きさは！」
「全高約八千二百ｋｍ、全幅約六千ｋｍ、全長は推定一万ｋｍと思われます！」
地球の約半分の大きさの戦艦…だと？
そんなものを動かすほどの能力があの国にはあるのか……
「全艦航行続行！　軍の命令があるまで通常航行！」
「了解！」
とりあえず、ここまで巨大な敵だとすると、連合軍の意見が無いとどうにもすることができない。
それに、シィーアを破壊してきたというのなら、衝撃ミサイルも当てられたはず。
なのに、それらしき痕がどこにもない……
防ぐ術があるのか…？
いずれにしても、撤退はほぼ免れないな。
ここまで来たが…仕方がない。

「どうして撤退なのよ！」
ファリエナを僕が無理やり引きとめる。
「まだ決まったわけじゃないよ！」
「別に部隊が解散するわけじゃないんですから……」
ギャルシュが止めに入ろうとする。
「私の天下はもう終わりなわけ！？」
やっぱりそこなんだ……
「それは仕方ないよ。年上の人たちだっていっつもなってるわけじゃないし」
「でも、私より絶対下手糞なのよ！？　小惑星帯さえ満足に抜けら

れないくせに！」
気持ちはわからないでもないけど……
「カンリイだっていつ指揮官になれるかわからないのに……」
へー、心配してるんだ。
「ますます航宙機隊隊長の座が遠のくじゃない！」
…結局それなんだ……
「部隊解散…ですか……」
シューエがどことなく憂鬱そうに言う。
「どうかしたの？」
ファリエナが抵抗をやめる。
「部隊解散しちゃったら、次はいつ再編成に加われるのかなぁ、って」
…そういえば、シューエは最後にカリーナさんが誘った一人だっけ。
入隊から三年目で初部隊っていうんだから、大変だったんだろうなぁ……
「大丈夫よ。また私が誘ってあげるから」
カリーナさん…たまにはまともなこと言うんだ。
「カリーナ…さん……」
「大丈夫よ」
でもなんか、カリーナさんの陰謀のような気がしてきた。
結局は彼女が欲しいだけだったりして。
シューエは押しに弱そうだしな……
「ま、どのみちこの部隊が解散するなんて、私がいる限り無いわね。
そうでしょ？　レステア」
「それを言うなら僕もでしょ？」
…ちょっと出過ぎちゃったかな？
怒るかも。
「まあ、少しはね」
お…怒らなかった？

今日は宇宙に雪が降るかな？
「もちろん二人は解散しても一緒にいるのよね？」
カリーナさんが僕たちを見て言う。
「当たり前じゃない」
「そうだと思うよ」
何かおかしいことがあるのかな？
「母艦が破壊されても？」
「ええ」
「うん」
「天地が避けても？」
「うん」
「…ええ」
「死ぬまで？」
「うん」
「……」
あれ？　なんでファリエナ答えなかったんだろ？
「へー。死ぬまで一緒にいるんだー」
ファリエナ、顔が赤くなってる。
恥ずかしいより…むしろ嬉しい方？
「…どうかしたの？」
「う…うるさいわね！　なんでもないわよ！」
…叩かれた。
なんか悪いことしたのかなぁ……

「通信用生体艦から通信が届きました」
ものの数時間で決着がつくとは、意外と決断が早かったな。
「本艦隊及び第二侵攻艦隊は即時撤退。
各艦隊は解散…だそうです」
指揮官としての任務はこれまでか。
あっけなかったな。

「半生体艦、及び生体艦は準備が出来次第地球にダイブ。
本艦も非生体艦を収容しだい、ダイブする」
「了解。全ハッチオープン。非生体艦はすみやかに着艦してください」

# Ｅｐ．Ｘ　天誅艦戦

Ｅｐ．Ｘ　天誅艦戦

「第二小惑星帯での非生体ミサイル艦二十四隻での合計四十八発の宙空衝撃弾頭ミサイルの攻撃はほぼ無効。

一時間で全艦撃沈。

第一小惑星帯での非生体主力戦艦百隻による飽和砲撃で左翼を撃破。

その後のジャシルタの総攻撃により二時間で全艦撃沈。

木星軌道上機動要塞十二機での攻撃を行うがジャシルタ数百機の撃沈に留まる。

八時間後に全機撃沈。

勝てるの？　こんなのに」

ファリエナが今までの天誅艦との対戦成績を読み上げる。

文字通り、連戦連敗。

これまでに三十万人以上の軍人があの艦に殺された。

「仕方ないよ。あと一時間後なんだから。

逃げる場所だってどこにもないんだし」

「…それはそうだけど……」

何だか、ファリエナはかなり落ち着かないみたいだった。

それもそうだよなぁ。

「…レステア？」

「何？」

さっきから何か言いたそうにしてるけど、ずっと隠して別の話題にもっていってる。

言いたいことがあったら言ったらいいのに。

「こんなときに…なんだけどさ……

その…やっぱりお嫁さんは日本人じゃないと…だめなの？」

「別に。もう純日本人は僕しかいないみたいだし。
地求人もシィーア人もファリエナみたいなハーフだって、結局は変わらないと思うよ」
何だか少しイライラしてるかも。僕。
そんなことしたくないのになぁ。
「そう…なんだ……」
「そういうファリエナはどうなの？　タイプとかっているの？」
僕は後ろを向いているからファリエナの表情はわからないけど、多分、動揺したんだと思う。
「あ、あんたみたいに…根性なしじゃなくて…あんたみたいに…反抗もしなくて…あんたみたいに…背も――」
「じゃあ、僕以外なら誰でもいいんだ。へぇ」
…ものすごくひどいことを言ってしまったのかもしれない。
こんなの僕じゃない。
一番不安がってるのは僕…なのかな……
「そ…そんなこと誰が言ったのよ！」
思わず振り返る。
ファリエナは泣いていた。
今度はファリエナが後ろを向く。
「な、泣いてなんかないんだからね！　泣いてなんか……」
「ごめん。ファリエナ。なんだか僕、どうかしてたよ。ありがと」
ファリエナは必死に涙を拭いている。
「…あんたのためにやったわけじゃないわよ」
「もっと楽にしていいよ。僕達はいつまでもいっしょだから。ずっとここにいるから」
ファリエナがこっちに向き直る。
目はまだ腫らしたままで、頬にはまだ水滴が残っていた。
「なに、この前みたいなクサい台詞言ってんのよ。
何度使ったって私を落とすなんて百万年早いのよ」
「言葉で通じないなら……」

僕は立ち上がるとできるだけゆっくり、不安がらせないようにファリエナに近づいていく。
いつの間にかファリエナより少し背が高くなっていたことに気付いた。
ファリエナは僕を見つめたまま、動こうとしない。
目からまた涙が出ているけど、拒否しようとはしていないみたいだった。
「…ぁ」
そんな小さな言葉だけを聞いて、僕はゆっくりとファリエナを抱きしめた。
僕をいつも殴っていた腕は意外と筋肉質じゃなくてびっくりした。
こんなに近くにいると意外といい匂いがすることにびっくりした。
ファリエナの僕への気持ちがなんとなくわかって、びっくりした。
「…ちょっと…何…やってんのよ……」
ファリエナは意外と動揺とかはしていない。
放心状態って感じだ。
「嫌なら、自力で抜け出したらいいじゃん」
「……」
こんなに長く僕を想っててくれたんだなぁ。
でも、今僕からそのことを言うのはなんだか可愛そう。
それに、このタイミングで言ったら二人とも死んじゃいそうだし。
でも、気持ちがわかっただけで本当に嬉しかった。

「ファリエナさん、やっとここまで来ましたね」
「そうね～。でも、これでこそやっと真の恋する乙女よ。
ますます欲しくなっちゃうじゃない」
「でも、私達にって、春…来るんですかね？」
「…春どころか人さえ来ません」
「…ああ～。なんかシングルマザーみたいでやだなぁ」
「…なら、どっちでもいいから、私と春にならない？」

「「…え」」
「春を通り越して、一気に燃え上がる夏まで行ってもいいのよ？」
「いや…私はそういう趣味は…ちょっと」
「…えーっと…あの…その……」
「返事しないからシュエりん、も～らいっ！」
「ふえっ！？」
「運動しなくてこっちの方にお肉がいってるからほんとに柔らか～い」
「か、勝手に夏まで持っていこうとしないでください！！」
「……」

あれからずっと、俺は別に指揮官のような位置にいるわけでもなく、ただレイの艦長として軍にいた。
今回も俺はプレーヤーではなく駒。
指揮官を経験してしまってから、どうも駒として動くのが何だか複雑な気分で、戦闘にも身が入らないでいた。
「全戦艦、臨戦体勢！」
今回、俺達は直接戦闘には加わらない。
なぜならレイは戦艦ではなく輸送艦。
特に基地での直接戦闘になった場合はただの邪魔である。
そこで、全ての輸送艦は天誅艦が侵攻してくる火星の地球側、直接砲撃が飛んでこないところで待機し、いざというときの箱舟になるのが役目だった。
最も、火星が落ちればあとは地球へと侵攻するだけ。
月も一応機動惑星としては稼動しているが、艦艇製造が主なため、戦闘はほぼ不可能。
大きさもあって、体当たりされただけでも吹き飛んでしまう。
仮に逃げ出せたとしても、奪還は不可能だった。
それに、今までに発見されている地球型惑星は四つ。
その内、鼎皇軍が完全に支配しているのは二つ。残りはシィーア

と地球だけだ。
一応、生命がいる可能性がある惑星というのは発見されているが、どれも元の火星に近いような灼熱か、極寒の星。
あてもないところを三次元空間移動で飛び回ったところで、全員が老化して絶滅していくのがオチだ。
「全非生体防御艦、ＦＦ格子粒子シールド展開！
全艦、全砲台発射準備！
全航宙機、エンジン始動！」
ただ一方的に聞くだけの俺達は、この星の裏側で起ころうとしている大規模戦闘なんてどこか遠い星の話で、ラジオを聞いているかのような気分だった。
「天誅艦、射程圏内に侵攻！　戦闘開始！」

すごい。
本当に思ったことはそれだけだった。
後ろから飛んでくる粒子砲や砲弾。
前から飛んでくる光速弾。
飛んでるのが不思議なくらい、眩しかった。
「ジャシルタの発艦を確認！
各航宙機は、迎撃にあたってください！」
遥か前に見える巨大な戦艦。
それから無数の光が飛び立っていることに気がつく。
…そっか。
…これって戦争なんだ。
これだけの人が守りたいあらゆるもののために戦っていくんだ。
力のない人たちが死んで、力のある人たちが生きる。
そうだったんだよなぁ。これって。
「航宙機、戦闘開始！」
モニターから鳴る警告音を聞けば、どれだけの数がいるのかがわかる。

軽く二十は超えている。
これだけ多いと、計測できてないのも一つくらいはある。
急加速して大編隊を抜けると、後方の味方の点が消えていっているのがわかった。
もう、こうなると敵とか味方なんていってられない。
ただの子供のいじめだ。
いじめっ子がいじめられっ子を追いかけていっても、自分がこけていじめっ子の方が泣いてしまう。
そんな感じがした。
でも僕は。
いじめっ子にもいじめられっ子にもなっちゃいけない。

「航宙機交戦中！
数が多すぎて砲撃できません！」
まあ、そうだろうな。
コウモリの大群のようなジャシルタと少数のタカのヴァルキリーでは混戦になるのは間違いない。
多分、ヴァルキリー一機に二十から三十のロックが常にかかっている。
性能や攻撃方法じゃない。
双方のパイロットの技術力、精神力、体力の差。
それが勝負の分かれ目だ。
モニターを見てみれば、ジャシルタの減っていく数は一秒に百機程度だが、ヴァルキリーの減っていく数は一秒に十機程度。
このままだと数の差で負けてしまう。
ＳＣ能力の分だけスキルは上といっても、ここまで混戦していると丁寧に敵の位置を把握している時間はない。
「全非生体主力戦艦、相互重力発生装置搭載弾装填！」
もろごとやるつもりか？
いや、ある程度カタがついてからか。

モニターを見てみると、一気に形勢逆転していることがわかる。
一機あたりにつく数が減れば、勝てるのは当たり前か。
「全航宙機、対重力砲用シールド展開！
一斉砲射！」
これで蜂の巣…か？
「次弾装填！　…発射！」
一気に使い切るつもりか。
「次弾装填！　…発射！」
…使い切ったな。
あとはおとなしくしてくれてればいいが。
「天誅艦中央より、槍状の物体が出現！
火星に打ち込もうとしています！」
惑星破壊兵器か…！
ジャシルタの大型版とでも考えた方がよさそうか。
星ごと破壊して、艦隊を壊滅させ、地球にも攻撃する寸法か。
「物体、発射されました！」

何あれ…？
あんなの見たことない。
「全艦、全航宙機、発射された物体に対して総攻撃！」
実弾、粒子砲、亜光速弾、重力砲……
いろんなものが飛んでくるけど、何一つ当たっていなかった。
というより、表面を滑っていった。
ジャシルタと同じだ。
一機のヴァルキリーが近づいていく。
あれは……
「…ギャルシュ！？」
まさかギャルシュの念力で止めようなんて……
そんな！？
「やめてよギャルシュ！　戻って！」

通信は返ってこないし、ヴァルキリーも止まらない。
念力で完全に槍を止めた。
そして、方向転換させようとする。
瞬間、何かがギャルシュの近くにダイブする。
でも。
撃ち落された。

……
……
……
……
…あれ……
……
ぼくまだ…生きてるや……
……
すごく痛いな……
……
ここどこだろ……
……
……
……
…そうだ……
……
お母さんを…助けようとして……
…お母さん…？
……
……
……ぁ。
……

……
……
どうして？
なんでそんなことするの？
そこにいるんだよね？　答えてよ。
答えてよ。
ぼくの話、聞いてるんでしょ？
じゃないとぼく、お母さんのこと嫌いになっちゃうよ？
だから…だから…だからだからだからだから
だから答えてよおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！

「物体付近より、計測限界を超えるＳＣ発生！」
なんだ？　なにがあった？

――リボリア！

いきなりレイが話しかけてくる。
いや、違う。
俺にも聞こえるくらいの強いＳＣでリボリアに何かを言っているんだ。

――お願いだから…お願いだからそんなことやめて！
――どうしたレイ！　リボリアに何があった！
――やめて！　やめてぇ！！

「ＳＣは一隻の生体艦より発生！
今も増大している模様です！
付近の航宙機は全て撤退してください！」
リボリアは一体何をやっているんだ！？

――お願いだから死なないでぇ！　そんなことしなくてもいいからぁ！
――何が――
――だめえええええええええええええええええぇ！！
瞬間的に頭が割れるように痛くなる。
ＳＣによるものなのは間違いない。
レイのものなのか、リボリアのものなのか。
そんな頭にうっすらと声は聞こえた。
「天誅艦…撃…止……」
そのまま俺は気を失った。

……

あの戦闘から丸四日。
俺は何とか退院し、久しぶりの地球を満喫していた。
天誅艦活動停止後、鼎皇国はすぐに降伏し、第二次銀河統一戦争は終わった。
あのとき。
何があったのかはよくわかっていない。
思い切ってレイに聞いてみたりもしたが、それきり黙ってしまって、話が続かなかった。
起きた事実はこう。
リボリアが放ったどす黒い光線が天誅艦全体を包み、そのときの攻撃で乗組員は全員消滅。
リボリアはギャルシュと共に死亡。
もはやＳＣどうこうの問題ではなかった。
いくら敵の砲撃でリボリアのＳＣ制御板がある程度剥がれていたとはいえ、ＳＣが計測限界を超えるということは最低一億以上のＳＣとなる。

完全に未知の世界だ。
この攻撃も、軍が目をつけないわけはないだろう。
実用化されれば、相互重力発生装置搭載弾も、宙空衝撃弾頭ミサイルも全て過去の遺物となることは間違いない。
軍人としてこういう考えはどうかはよくわからないが、俺はあまりあれが兵器になどなってほしくはない。
どんなに危険だとしても、あれはリボリアとギャルシュの愛があったからこそできたもの。
それを、人を殺すために使うのはあまり賛同できない。
「あ、あの…カンリイ艦長？」
「おいおい。ここは軍の施設でもなんでもないんだぞ？」
「ですが……」
「…仕方が無いな。置いてくぞ」
「あ、待ってください！」
一時的であれ永久であれ、一応の平和は訪れた。
これからも俺達は生きていかなくちゃいけない。
死んでしまった仲間のために。
そして何よりも、俺達のために。

## Ｅｐ．Ｘ　天誅艦戦（後書き）

どうも。鯖味噌汁です。
文章量が大してないくせに無駄に長かったです。六ヶ月です。ぐへへ。
とりあえず、言いたいことはこれくらいですかね。
お読みいただき、ありがとうございます。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6845e/

U.G.II

2010年10月8日15時27分発行